

原田助とハワイ大学

太田雅夫

はじめに

- 一 英文の略伝
- 二 ハワイ大学への招聘
- 三 排日問題と日米関係委員会
- 四 ハワイ大学と日本学
- 五 教え子の日系人学生たち
むすびにかえて

はじめに

原田助は一九〇七（明治四〇）年に同志社第七代社長（のちに総長）として就任し、一九一九（大正八）年に辞任するまでの一二年間にわたって、同志社の発展のため尽力し、同志社中興の祖とまでいわれた人物である。同志社は熊本バンド出身者をはじめとして、幾多の人材を輩出してきたが、同志社自体の発展のために貢献したという点では、原田に勝る者はいないといっても過言ではない。その最たるものは、一九一二年に同志社の創立者新島襄の宿願であ

った同志社大学の開校をみたことである。また、積極的に国際親善・国際交流活動に取り組み、同志社の名を海外に広めた点でも、国際人原田の貢献は大きかったといわざるを得ない。

同志社総長を辞職した原田は、翌年の一九二〇年、ハワイ大学教授として招聘されて、家族同伴で赴任し、日本歴史・日本文学・日本語・東洋宗教史の講座を開設した。その後一九三二年病気のためハワイ大学を退職するまで、二年間の長きにわたりハワイ大学の日本研究の基盤をつくるとともに後継者を育ててきた。さらにハワイの日系人社会とアメリカ人社会との絆を結ぶ接点として重要な役割を果たしてきたのである。

ハワイにおける原田は、ハワイ大学の発展のための貢献はいうまでもないが、日系人社会の指導者として、日系人の地位向上、日系二世の米化運動、日本語学校問題、ハワイの国際主義運動とりわけ汎太平洋同盟（PPU）・太平洋問題調査会（IPR）のために貢献してきた。しかし、ハワイ時代の原田助研究は数少ないのである。先行研究は沖田行司「国際主義と移民教育論」（『ハワイ日系移民の教育史』ミネルヴァ書房、一九九七年刊、所収¹）と竹中丈夫「同志社とハワイ」（『同志社アメリカ研究』第二二号、一九八六年²）くらいである。

これは、ハワイ時代の原田に関する資料が数少ないことに起因する。原田健編『原田助遺集』（一九七一年）の「あとがき」でも、「日記類にしても、例えば十二年に亘る布哇在住中の英文日記は何故か全く欠けて居り、……布哇大学に於ける各種講義録など無数の演説筆記を欠いて居るのは、全く申訳けない次第であります。」³とのべている。

筆者は一九九六年度のハワイ大学日本研究センターでの研修中、「汎太平洋同盟（PPU）と太平洋問題調査会（IPR）」のテーマで研究調査を進めてきたが、その間に原田助に関する資料の収集も行った。その結果、原田の論稿を雑誌・新聞等から四〇数篇収集することができた。また原田の五女相賀美也子氏（当時八八歳）、原田の三女毛利美佐尾の二男毛利元二郎氏（当時七三歳）の両氏とのインタビューで、貴重なお話を伺うことができたのである。

る。

本稿では、「原田助とハワイ大学」のテーマに限定して論述する。ハワイ時代の国際人・教育者原田助の一端でも明らかにすれば幸いである。ハワイ日系人社会の指導者としての原田、国際主義運動における原田については、「ハワイ時代の原田助」として改めて論じる予定である。

一 英文の略伝

原田助の略歴として最も詳細なものは、一九三四年六月二三日に行われた原田助古稀祝賀記念会の席上、大沢徳太郎がのべた「祝辞」⁽⁴⁾と、一九四〇年二月二五日に行われた原田助の同志社葬に際し、山口金作牧師が朗読した「故人の略歴」⁽⁵⁾であろう。しかし、これらの略歴より更に詳しい英文の略伝として、同志社大学教授シドニー・L・ギューリック (Sidney L. Gulick) の“A BIOGRAPHICAL SKETCH OF TASUKU HARADA, D. D., LL. D.” (1912) と関西学院高等商業学部教授川地健助の“ADDITIONAL SKETCH” (1937) ⁽⁶⁾がある。英文であるため従来殆ど知られていないので、まず英文を翻訳して紹介しておく。

シドニー・ギューリックは、アメリカン・ボード宣教師で一九〇六年から一九一三年まで同志社大学教授として、科学概論や進化論を講じていた。シドニー・ギューリックは、この略伝を書いた翌年アメリカに帰国している。丁度、原田助の同志社社長時代に同志社に在職し、一九一〇年のエジンバラで開催された世界宣教大会及び原田助がエジンバラ大学から法学博士の名誉学位を授与された席上にも同席していたのである。ギューリックが描いた略伝の追記を書いた川地健助は、ハワイ大学時代の原田助の教え子である。ハワイ大学卒業後、一九三〇年には同志社大学のスチ

ユードント・プロフェッサー (Student Professor) として来日し、のち関西学院高等商業学部教授として英語学を講じていた。この追記は、原田助のハワイ大学時代を知り得る貴重な資料でもある。

〔翻訳〕

原田助 (神学博士・法学博士) の略伝 (一九二二年)

同志社大学教授 シドニー・L・ギューリック

原田教授の牧師・著述家・教育者としての業績は、日本のクリスチャンの中でも際立っている。彼は日本のキリスト教の発展のために素晴らしい貢献をした。彼のキリスト教への考え方は、同志社の社長就任演説に述べた「教育は、人間の精神への訓練なくして、成し遂げられない。又、均整のとれた人類の発展というのは宗教論理なくして有り得ない。同志社は組織的人生的核心と中心にあるキリスト教を通して生徒たちに強く純粋な人格形成・精神訓練・そしてその発展を育みます」という短文にあらわれています。

原田教授は一八六三(文久五)年一月一日に熊本に生まれ、古い武士制度の中で育ちました。助が生まれたのは、鎌田(取の次男)という家ですが、幼いときに、原田家の当主となるべく、養子にされました。

長兄(鎌田安)はもう生存していませんが、長らく鹿児島裁判所の判事をつとめていて、他の一人の弟は岡山の第六高等学校の三宅(亥四郎)教授です。三番目の弟(佐藤辰郎)は、東京で弁護士をしています。原田教授は、まず最初に、あの有名な横井小楠の義理の兄弟に当たる、有名な儒学者の竹崎(律次郎)が建てた熊本の私立学校(日新堂)で教育を受け一八七七年洋学校に入学した。この熊本洋学校というのは、小さいけれども有名で、日本に西洋学問を紹介した先駆者の存在です。そして、この学校の非凡なるキャプテン・ジェーンズの影響で、沢山の生徒たちがキリスト教に興味を持ち始めました。これらの青年達が一年後に花岡山のもとに集まって、キリスト教とその文化を日本に広めようと誓約したため、熊本洋学校は突然、混沌とした状況に置かれ、又、迫害を受けるようになりました。けれども、この四〇人余りの青年たちは、キャプテン・ジェーンズの導きによって、京都にいて、二年前に建てられた同志社に入りました。原田氏はこの時、まだ余りキリスト教に感化されていなかった。このグループの一員ではありませんでした。彼はあの著名な漢学者嘉悦(氏房)によって創立された熊本にある別の私立学校(広取英和学校)に更に三年間在席しました。ここも、小さいけれども、近代の日本において活躍した外務大臣内田康哉子

爵・衆議院書記官長林田亀太郎などの人材を輩出した学校です。原田氏は一八八〇年に同志社の英学校（本科）に入学し、その一年後に卒業しました。その間、先輩の熊本洋学校出身者によって、キリスト教に感化され、一八八一年には洗礼を受けるまでになりました。そして、卒業後、すぐに神学科（余科）に入学しました。けれども、神学科を卒業する一年前に、現在の神戸女学院である神戸英和女学校で教えるよう要請されました。あまりにも真剣に要請してくるので、彼は終に神学科に在席しながら教鞭を取ることにしました。彼は殆ど独学で勉強し、試験や質問のために京都に戻るといふ生活を続けながら、一八八四年に神学科を卒業しました。

原田氏は神学科を卒業したのですが、文学者として世に立とうと思ひ、それで、神戸女学院の職についたのです。けれども、神学科を卒業する直前に、思い掛けず、日本で最初の組合教会である神戸教会の牧師になりました。前任の松山（高吉）牧師が聖書翻訳の任に就くため、横浜に行くことになり、教会が満場一致で原田氏に牧師の任を依頼したのです。散々悩んだ揚げ句に、原田氏は、この仕事をひきうけました。この時、原田氏はまだ二一歳でした。

これらの間、原田総長は執筆活動を止める事はありませんでした。彼の執筆したものは主に新聞や雑誌に掲載された短いものを中心ですが、二冊の本も書いています。それは『イエスの時代』と『信仰と理想』というのです。「日本のキリスト教の現状」というインタナショナル・レビュー・オブ・ミッションの第一号に掲載された論文は、優れた知識と深い分析力で東洋のキリスト教者のためになるものです。

原田社長の性格は、彼の顔つきと体付きに現れています。しっかりしていて、慎重で、控えめです。彼の組織の統率者並びに総理事としての能力はこれから判断されるようになることで、今は何もコメントすることはできません。演説者としては言葉を慎重に説得力のあるように選び、それは創造力や感情のこもったものではありませんでしたが、たまには彼の真情が吐露されることがあります。感情を込めた演説法をとる海老名弾正先生や宮川経輝先生の方が大抵雄弁とされていますが、原田先生も同じ様に雄弁な時もありました。例えば法学博士の称号を与えられた時のエジンバラの世界宣教大会で見た演説は表現が巧みで素晴らしいものでした。彼の控えめさは同僚や部下を熱狂的な気持ちにさせることはありませんでした。しかし、常にしっかりとよく考えて行動し、判然とした落ち着きぶりと冷静な判断ぶりは同僚の信頼を得ていましたし、彼の雄々しい考え方や力強い声や魅力的な性格は彼を結構雄弁家にもしていました。

原田氏の六年間の社長時代、同志社は色々な面で成長しました。最近には三〇万円の寄付金が校友会から集められましたし、四年前にはアメリカの同志社支持団体によって女学校に一〇万ドルが寄付されました。学部やコースが新設されましたし、文部

省から同志社大学の名称を使う許可を受けました。同志社は今一番発展の時を迎えています。

原田氏は、四年間、神戸教会の牧師をつとめました。その間に、神戸教会は、日本でも最大規模の教会に成長し原田氏が辞した時の会員数は四〇〇人にもなっていました。聴衆は常に五〇〇人から六〇〇人余位の大人数でした。けれども、原田氏は、もっと勉強したいと考え、丁度建物を立て替えている最中にアメリカに二年間留学することにしたのです。しかし、二年以上の留学後、教会に常任の牧師を迎え、又、三年間の勉強を全部終えるために、教会の任を辞任することになりました。一八八八年から一八九一年まで、彼は、アメリカにいたということになります。彼は、最初の数カ月をシカゴ神学校で過ごし、二年間イェールにいました。殆どの間、神学校に在席し又大学の研究科でも勉強しました。

原田氏は日本組合教会により、第一回組合教会世界大会に代表として派遣されたので、一八九一年にロンドンに行きました。そして、ヨーロッパの各地をウィリアム・グリフィス博士と旅行した後、ヨーロッパ経由で日本へ帰ってきます。その際、原田氏は同志社の教授として迎え入れたいという申出がありました。彼はいったん、それを受け入れますが、更に東京の番町教会の牧師として迎え入れたいという申出もあり、原田氏は結局、教授の職を辞して、東京へ向かいます。番町教会は日本で最も重要な教会で、そのメンバーには、岡部長職子爵・大審院々長の三好退蔵・帝国大学の和田垣謙三教授がいました。原田氏は、この教会の牧師を一八九二年から一八九五年まで勤めました。この時代は反キリスト教色が強く、多くの教会が困難を抱えていました。

この時、原田氏は又『基督教新聞』の編集者であり、『六合雜誌』の共同編集者でありました。更に、日本組合教会会長になり、一〇年以上その職にいました。一八九五年に彼は健康上の理由をもとにこの職を退き、何カ月かの間文学研究に没頭しました。そして、長い間牧師がいなくて牧師を探していた京都の平安教会の牧師になり、二年間この職にいました。この間、彼は同志社で新約聖書の講義も持っていました。一八九八年に彼は再び七五〇人もの信者を持ち、日本のプロテスタント教会としては最も大きい教会に成長していた神戸教会の牧師の職に就きました。この間二つないし三つの教職の申出がありましたが彼はそれを断り、一九〇七年に同志社の社長として迎え入れられるまで八年間神戸にいました。

神戸教会に勤める間に原田氏は三回海外へいっています。一回目は一九〇〇年に万国共励大会のためロンドンに行った時で、この時彼はベルサイユで開催された万国YMCA大会にも出席し、故本多庸一牧師と一緒にヨーロッパの各国を旅行して、スエズ運河とインド洋経由で日本に帰ってきます。二回目は一九〇五年で、インドのYMCAの招聘で国際会議に出席しました。元田（作之進）博士と一緒にあの素晴らしい大陸に滞在し二三の都市で演説や説教をしてきました。

一九一〇年に原田社長はハートフォード神学校に「日本の信仰心」について話すためハートフォード・ラムソン講義に招かれました。そこへ行く途中に彼はトルストイ伯爵を訪問しました。原田社長は最後にトルストイ伯に会った者の一人です。原田氏はトルストイ伯に日本製の杖を献上し、トルストイ伯はお礼にと自分が長年愛用していた杖を与えました。原田社長は又一九一〇年六月にエジンバラで開催された世界宣教大会の出席者の一人でもありました。その際、彼はカンタベリー大監督や大会議長のエット氏などの世界の宗教指導者と共にエジンバラ大学から法学博士の名譽学位を贈られました。ハートフォードで講義を終えた後、原田社長はこの講義の一部をハーバード・イェール・シカゴ・コーネル・オベリン・アマーストの各大学で行っています。アマースト大学では原田社長に神学博士の名譽学位を贈りました。

原田社長の理論は、保守派のリベラルという言葉であらわされるでしょう。彼は常に毎日の精神生活を営む上での私たちの心の中にキリストがいる力強さ、精神生活の現実性、を説いていました。

全てを考慮するに原田社長は、日本のキリスト教運動の中でのもっとも影響力があり、均整のとれた指導者の一人ということになります。このことは、彼が組合活動の中で、何回も最高職に就いた事に示されています。

さて、この略伝をエジンバラ大学法学部長（サ・ルドヴィック・グラント教授）が、原田社長に博士号を授与するときの推薦の辞、それに対する原田社長の答辞（一九一〇年六月一日の『スコッチマン』掲載）で締め括ることにします。

当大学より見てもっとも興味多くかつ大切なことは多方面にわたる外国伝道の挙において、高等な教育を進行させる制度の発達完備をすることである。そして外国伝道の結果として産出する教育機関のなかに於いて、日本のキリスト教主義教育の代表者である同志社大学は稀なものであり、この有名な機関が現に今日の位置を占めたことも、なお将来の発達を示しつつあることも、現に社長の任にある著名な宗教家の熱心な注意と高潔な理想に負うところが多いことは云うまでもない。

牧師原田助氏が同志社社長の任については三年前のことで、世人は同志社の社運はこれより隆起するだろうと望望したが、氏はその待望に負けなかった。氏自身は同志社卒業後、イェール大学神学部に進み、以来長い間成功ある牧会の任に当たってきた。氏が統率の才に富んでいることは、日本キリスト教共助会会長。日本組合教会総会議長の任を全うしたことに於いても明らかである。

また、氏は中国・インドにも招かれ、いたるところで行った講演も大成功を収め、氏の著書はキリスト教神学に対する有力な貢献となった。同志社社長の率いる教授らと、氏の過去における尽力とは、東西両洋思想の融和をもたらし、両者の隔離を除くことにおいて功績が多いことは、疑いを容れないことである。当大学は原田氏のこのような功勞に対して賞讃の印

を捺し、ここに氏に請じてわが法学博士の班に容られんことをこい願ったのである。

原田博士は拍手喝采によって、迎え入れられ、この称号授与の知らせを謙遜の精神を持って聞きました、と言いました。彼は自分自身をこの称号に値する人物と思わなかったけれど個人的には無く、優れた使命の代わりに、又日本国の代わりにこの称号を受けとることにしました。少年時代から彼はスコットランドに強い憧れを持っていました。それはジョン・ノックス、ウォルター・スコット卿、カーライル、バーンズ、ダフ、リビングストン、ウイリアム・ハミルトン卿、ジェームス・シンプソン卿、ケルビン卿といった日常世界のどの家庭でも話題にのぼる人々の出身国でした。原田氏はスコットランドほど多数の信仰と文化の領域において類まれな優秀な人物を輩出した国と無いと思いました。そして、国の偉大さというのはこのような卓越した人材を何人出すかと言う事にかかっているのです。原田博士はこの国を賞賛しておりこの国と、以上に述べたような卓越した人物を沢山輩出した歴史的な高等機関と今や結び付きができたことを不思議に嬉しく、ありがたく、思ったのです。そして博士号授与という出来事が東西のより良い理解と団結に結び付く事を願ったのです。

追記（一九三七年）

関西学院高等商業学部教授 川地 健助

一九二〇（大正九）年に原田博士はハワイ大学に日本歴史・言語・文学の教授として招かれました。彼は一九三二（昭和七）年に健康上の理由で辞すまで、この職にありました。彼は学究的研究と幅の広い交際を通じて国際関係の友好と東西の解釈に大きな役割を果たしました。

彼は又ハワイの二世の問題解決に勤め、二世がアメリカの市民として自国に尽くし、同時に東洋の先祖伝来の特徴を失わないよう指導しました。二世は原田博士を静かに見守って下さっている指導者として、又友達として、感謝していました。もっと厳密に言えば原田博士は二世の立場を向上させる立場にいたわけです。

原田博士は又、国際関係に於いて重要な役割をとげられました。彼は汎太平洋同盟（PPU）で理事をホノルル・キリスト教青年会で役員を太平洋問題調査会（IPR）で顧問を勤められました。又、ハワイでの滞在中二年ごとに行われる太平洋問題調査会の日本委員でありました。ハワイ大学から数分のロッキーマン・ヒルに建てられた原田博士の住いは、ダイヤモンド・ヘッドとワイキキが一望でき常に日米の観光客のメッカとなっていました。又、沢山の人々、特にハワイ大学の二世学生達にとっては懇

いの場所でありました。

六九歳に退職なさった時、原田博士は名誉教授としてハワイ大学にむかえられました。又、その後、秋の評議会によって、ハワイ大学から法学博士の名誉学位を授与されました。これはハワイ大学がだした二つ目の法学博士の名誉学位です。一つ目はハワイ共和国の最初で最後の大統領であり、又、ハワイ準州の最初の知事であったサンフォード・バラード・ドールに贈られています。

法学博士の名誉学位を授与するに於いて、ハワイ大学総長デービッド・L・クロフォードは次のように祝辞を述べています。

原田氏は日本の同志社総長として数々の尽力をなさった後、ハワイ大学へいらっしゃいました。彼は、東西の文化の通訳者としてハワイへいらっしゃったのです。ハワイとアメリカに於いて、彼は日本と西洋の理解を深めようと常に確固とした努力をなさった方として知られています。教授として、講演者として、著者として、また友達として、原田博士は何千人もの西洋人に真の東洋について知識をわけあたえられました。そして一二年が過ぎた今、原田博士は健康上の理由からこの職を辞せうとされています。そこで、ハワイ大学は彼を名誉教授として迎え、法学博士の称号を贈ることにしました。

() 内は、すべて訳者の注である。

二 ハワイ大学への招聘

原田助は、一九〇七年一月、同志社内外の与望を背負って、神戸教会牧師より第七代同志社社長（一九一七年より総長）に就任した。一九一九年一月に辞職するまでの一二年間にわたり、同志社の発展に寄与し、同志社中興の祖とまでいわれていた。とくに、一九一二年には、同志社の創立者新島襄の宿願であった同志社大学（政治経済部・英文科・神学部）および女学校専門学部（英文科・家政科）の開校を成し遂げたのである。さらに、学生総数と基本財産を社長就任時に比べ約三倍の規模にまで発展せしめた。

一方、イギリス・アメリカ・中国などへの講演旅行を行ない、積極的に国際親善・国際交流活動に取り組み、同志

社の名を海外に広めていった。また、日本国内や海外から各界の代表的な人物を招き科外講演を実施して、学生に国際主義の感覚を植えたのである。⁸⁾しかし、原田は一九一七年夏以来、同志社の学内紛擾の渦中の人となり、つい
に一九一九年一月、この始末は自らの「不明不徳」によるものであるという、告別演説をして失意の内に同志社総長
を辞任した。辞任の大きな要因として、講演や伝道を含む国際交流や活発な対外活動が、同志社の伝統派の批判を受
けて退ぞかざるを得なかったといわれている。⁹⁾

原田は同志社総長を辞職後、一九一九年五月から約一年間にわたって、欧米の大学や教会関係者・各地の日本人会
の招きにより講演旅行を行った。その帰途、ハワイ伝道百年祭に参加のためホノルルに寄港したさい、一九二〇年四
月二二日にハワイ大学総長アーサー・L・ディーン(A. L. Dean)より、ハワイ大学の日本歴史と日本文学の教授と
して就任するよう招聘を受けることとなった。そのさい、住居・旅費・七年に六カ月間のサブティカル等の条件を示
されている。¹⁰⁾

実は原田とハワイとの関係は、それ以前に遡るのである。原田が最初にハワイの地に寄ったのは一九一一年二月三
日〜九日までの一週間である。すでに「英文略伝」でのべたように、一九一〇年四月から、シベリア経由でトルスト
イに会ったのち、エジンバラで開催された世界宣教大会に参列し、帰途アメリカンボード百年記念会に参列、その後、
アメリカの諸大学で講演した。この間に、エジンバラ大学よりL.L.D.(法学博士)、アーモスト大学よりD.D.
(神学博士)の名譽学位を贈られたのである。その後、日本への帰途ハワイに寄港したのであるが、実はこれは、ハ
ワイのビッグ・ファイブ(五大財閥)の一つである実業家であり、政治家のハワイ大学理事のウィリアム・R・キャ
ッスル(William R. Castle)のすすめによるものであった。¹¹⁾

原田とキャッスルとの関係は、キャッスルが一九〇九年日本を漫遊したさい、同志社を訪問したときからである。

キャッスルは、ハワイのキング・ファイブの Castle & Cooke, Inc. の一族で、ハワイアン・ボード (Hawaiian Evangelical Association) の役員であり、同志社女学校のデントン (Florence Denton) の知人でもあった。このとき、同志社では原田社長以下教授役員らが、キャッスルを歓待し、膝を交えて懇談した。これ以来、同志社とキャッスルの間は、きわめて親近の間柄となつていたのである。¹²⁾

キャッスルは、原田の欧米講演旅行を知りアメリカからの帰途、ハワイに立ち寄り清遊することをすすめた。原田はこれに応じ、キャッスルの許に、二月三日コレア号で来布することを知らせた。原田の来布の知らせは、日系人社会の話題となり、邦字新聞『日布時事』には、「原田校長の来布―来月三日の便船を以て」(一九一一年一月七日)「原田同志社校長の略歴―今回大博士を贈らる」(一九一一年二月三日)などと報じている。原田の来布は、清遊的なもので、ハワイ島の火山見物などを考えており、布教運動を試みるためではなく、セントラル・ユニオン教会牧師ドレマス・スカッダー博士 (Doremus Scudder) の家の客となつた。¹³⁾ 原田がホノルルに着くや、邦字新聞の記者たちが取り囲み、カリフォルニアの排日運動の様子を質問した。原田は、「今日吾が同胞中には渡来禁止以来在米日本人社会の前途を悲観する者ありと雖も、之れ恐らくは杞憂に属せん。米國太平洋沿岸に於ける日本人は、今や牢乎として抜くべからざる根底を作り、渡米同胞痕を絶ちたりと雖も、其の人口は出生児童の増加と共に補充されつゝあり、最早今日に於ては米國人如何に排日熱を唱へて日本人を排斥せんとするも到底不可能なるべし。」と答え、「日布時事」(一九一一年二月三日)にその談話が掲載された。

原田のハワイへの寄港は、キャッスルのすすめで清遊的なつもりで、講演などする予定は考えてもいなかった。しかし、同志社出身のヌアヌ教会堀貞一牧師・マキキ教会の奥村多喜衛牧師らの要望により、急拠二月七日にヌアヌ日本人小学校で、「東西民族の長所」と題して講演会が開催されることとなつた。¹⁴⁾

原田は今回の欧米旅行にさいしては、各国の宗教界、教育學術界・政界などの代表的人物との会談を心掛けていた。アメリカでも大統領タフト (William Howard Taft) や前大統領ルーズベルト (Theodore Roosevelt) などを訪問し、とくに前大統領ルーズベルトには、「不肖は郷国日本に於て九〇〇名の青年学生を預る者 (同志社のこと)、貴下願くば之れ等学生の訓戒となるべき貴下の所感を記し与へられんことを」と依頼した。ルーズベルトは快諾し、一九一〇年一月二十五日のクリスマスの日付けで、自筆の手紙を原田に寄こしたのである。原田は講演で、この手紙を読みあげた。そこには、「日本古来の優秀なる旧道徳を保存すると共に日本将来の富強と日本人未来の繁栄との為に必要な新道徳を求めよ⁽¹⁵⁾」と記してあった。

原田はこの手紙は同志社学生のために記されたのであるが、ルーズベルトの同志社学生に望むところは、すなわち一般日本人の青年に希望されるところであるとして、講演のテーマにしたのである。

原田は、「日本帝国々運発揚し大和民族が世界的発展の途にある今日吾人国民の最も研究を必要とするは、旧道徳と而して新道徳に就てなり日本在来の保存せざるべからざる旧道徳の何なるやを研め更に欧米新道徳の学ぶべきものは何なりやを知り、短を棄て長を採り以て国家の為に図ると共に併せて世界の文明に貢献する処なかるべからず⁽¹⁶⁾」として、まず、日本人の長所をのべる。

日本人の長所としては、原田がすでに一九〇一年七月に神戸女学院で開催された米国宣教師会の講演で、「日本人の性質と基督教―両者の接点及反抗点」のテーマのなかでのべているのと全く同じ特性を挙げる。すなわち「義理の念」「報恩の情」「廉潔の性」「忠孝の徳」である。原田はこの四種の旧道徳は、今後永久に保存すべき必要なものであると信じている。ルーズベルトの手紙にいう「日本在来の優秀なる旧道徳を保存する」は、これらの道徳を指すと強調する。そして、日本国民が今後世界の舞台に雄飛せんには、畢にこれらの日本在来の道徳のみに拠って

はならない。これからの日本は、泰西民族の長所を学び、これを採用しなければならぬとして、欧米講演旅行で知得した、泰西民族の長所として次の四種を挙げる。すなわち、「敬神の念」「責任の念」「家庭の念」「奉公の念」を挙げ、日本人にこの四種の長所が全然ないとはいわないが、大いに欠如しているところである。ルーズベルトのいう「日本将来の富強と日本人未来の繁栄との為め必要なる新道德」とは、これらの道德を意味していると主張した。そして、講演の結論として次のように締めくくった。

今や我が国民は国家勃興の氣運に乗じ、世界的發展の途にあり、此の時に際し吾人は吾人の将来所有せし日本古来の旧道德のみに抛りては、到底世界各種の民族と伍して輸贏を争ひ、各国列強に伴して盛強を競ふ能はざるべし。吾人大和民族を世界に榮えしめ、吾人の国家を九鼎大呂の如く、列国中に重からしめんと欲せば、宜しく従来所有せる旧道德の優秀なるものを保存すると共に、泰西民族今日の繁榮を見るに至りたる其の要素たりし新道德を学び、長を採り短を補ひ以て國家の盛運に資すると共に、進んで世界の文明に貢献する処なかるべからず。思ふに斯くの如きは我れ等郷土に在る者も、諸君の如き在外の人々も、今日此際に於て最も研究を要する問題に非らずや、余は諸君が之れ等の点に就て今後大に考究されん事を切望に堪へず。¹⁸

原田のこの講演は、ハワイ在住の日系人に大きな感銘を与えた。原田はその後、ハワイで伝道中の同志社出身の牧師や、ハワイアン・ボードの役員らと懇談をもち、帰国したのである。

原田の帰国後、一九一一年一〇月にキャッスルから同志社経費として三千六〇円一五銭の寄付がなされ、ハワイと同志社との密接な関係がもたれることとなった。¹⁹その証拠として、原田社長時代に、キャッスルとウイリアムD・ウエスターベルト(William D. Westervelt 当時のヌアヌY M C A事務局長)の二人が、同志社社友となっているのである。²⁰

実は、この原田の第一回目の来布が、のちの原田へのハワイ大学招聘の遠因になっていることは、従来知られていない事実である。原田は同志社紛擾の責任をとり、失意の内に同志社総長の職を辞したのち、一九一九年五月一八日、

欧米の講演旅行に出かけるため横浜港を出帆した。途中五月二七日にホノルルに寄港し、ウエスターベルト・ヌアヌ教会牧師堀貞一・マキキ教会牧師奥村多喜衛・ホノルルYWCA幹事岸本つる等に出迎へられ、ヌアヌ・パリに案内されたのち、諸井六郎総領事を訪れている。その夜はヌアヌYMCAで、日本の近情について講演し、総領事ら日系人約八〇名ほどの聴衆が集まった。そのなかに、『日布時事』社長相賀安太郎もいた。相賀は一九一五年日本へ帰國中、一月一二日の同志社創立四〇周年記念祝賀会に招待され、ときの同志社社長原田とは旧知の間柄であった。後述するが、後年相賀の長男重雄と原田の五女美也子が結婚することになる。原田は、ホノルルで同志社出身者や知人たちの温かい歓迎を受けたのち、アメリカへ向ったのである。

その後、ハワイでは、一九二〇年四月は、宣教師団ハワイ上陸百年を記念して盛大に祝賀しようとして、ハワイ伝道百年記念祭委員会が組織され、その委員長にウイリアム・R・キャッスルが就任した。さらに一九一九年八月には、東京ユニオン教会牧師であった当時アメリカ赤十字日本支部幹事のドレマス・スカッター博士が、日本から呼び戻され主任幹事となり準備に当った。一九一九年二月三〇日に、ハワイ準州知事とチャールス・J・マッカーシー (Charles J. McCarthy) が、「一九二〇年四月一日より一九日までをハワイ伝道記念週間とすべきを準州民に布告し、併せて米大陸の人士にこの記念会に参加せんことを勧む」という布告を發した。

記念祭委員会は、アメリカ本土より多くの名士の講演・説教を依頼したのである。委員長キャッスルと主任幹事スカッターは、アメリカ人名士の他に唯一日本人のキリスト者原田に説教の勧誘を行った。原田はアメリカ講演旅行中であつたが、一九一九年一月一九日ニューヨークから発信した妻佐喜子宛の書簡で、次のように伝えてきている。

来る四月十一日ヨリホノルルニ於て布哇伝道百年記念大会開催サレ出席ノ勧誘ヲ受ケタルガ、或ハ同地ニ立寄り帰朝スルコトナルヤモ知レズ決定ノ上ハ申送ルベシ

ここで想起してほしいのは、原田が一九一一年二月に初めてハワイに寄港したのは、キャッスルのすすめによるものであり、ホノルル滞在中はスカッター博士の客となっていたことである。キャッスルとスカッターが原田をハワイ伝道百年記念祭に招いたのは、ただ単に「説教」を依頼するのみではなく、ハワイ大学への招聘の問題が含まれていたのである。原田は、アメリカからの帰途、ハワイ伝道百年記念祭参加のため、コレア号にて四月五日にホノルルに着いた。ハワイでは、砂糖耕地の日本人移民六〇〇〇人による第二次オアフ島大ストライキの最中であった。原田は一日から百年記念祭のプログラムに参加していたが、一日に京都の留居宅から二女秋子の急病のため、すぐ帰れとの電報を受けとった。しかし、四月二三日の天洋丸の出帆まで待たざるを得なかったのである。一日の夜は、日本人聯合協会理事長毛利伊賀ドクターの晩餐の招待に応じた。⁽²⁾ これまた、後述するが後年毛利の長男元一と原田の三女美佐尾が結婚することになる。

百年記念祭プログラムも最高潮に達した一八日の日曜日の夜、国民軍武庫において連合礼拝が行われ、原田は唯一の日本人としてゴルドン博士とともに説教の大役を果したのである。ハワイ滞在中原田は、日系人に対し数多くの有益な講演を行い、また、千人伝道のためホノルル滞在の木村清松牧師とハワイ島に渡りヒロ市を経てキラウエアの大噴火口をみている。そのときの感想を原田は、「奇絶怪絶の壮観は相像の及ぶ所に非ず」と書き記している。⁽³⁾

そして、日本への帰国の直前、四月二一日にハワイ大学総長アーサー・L・ディーン博士(A. L. Dean)からハワイ大学への招聘を受けることになった。ハワイ大学は従来、農工両科の単科大学であったが、一九一九年の準州議会で一九二〇年九月を期して、総合大学に拡張することが決議されていて、その準備中であった。ディーン総長は、日本歴史・日本文学の教授として就任して欲しいと懇願し、原田自身も住居や旅費及び七年に六カ月のサバティカルなどを提案し、了解されたので考慮することを約したのである。いち早く『日布時事』はこのことを報じたが、四月二

六日、ディーン総長は日英字新聞記者と会見し、「日布時事に掲載せられたる該報道は確實なり、然共此は尚ほ交渉中にして原田博士が果して此れを承諾するや否や未定なり」と明言した。

『日布時事』（一九二〇年四月二七日）は、ディーン総長の言明を伝え、さらに次のように報じた。

大陸加州及びスタンフォード両大学に於ても、既に見る所にして前者は乾氏を、後者は市橋氏を教授として、一般学生に日本文学及び日本歴史を学ばしめつゝあり。而して当布哇に於て、大学内に日本課を必要とするは、従来屢々称えられし所にして此れが九月より遂に実現を見るに至りしものなり。原田博士がディーン総長の希望を容れて、再び此地の人とならんか、当地に於ける排日緩和の爲め、又十一万同胞の爲め其他総ゆる方面よりして、日本人側に益する所甚大なるは言ふ迄もなし。此意味に於て同博士がディーン総長の推薦を承諾せん事を希望して止まざるが、同博士も亦帰朝の上は止むを得ざる故障のなき限り、此れを承諾すべしと観測せられつゝあり。

ハワイ大学および日系人社会の人々の期待のなか、四月二三日、原田は天洋丸で帰國の途につき、五月四日に横浜に着いた。この航海中に無線電信により、次女秋子が四月二四日に急病のため永眠したという訃報に報じた。

原田は帰國後、家族や関係者とハワイ大学よりの招聘問題につき相談の上、五月二三日に、ハワイ大学よりの招聘を受諾し、八月末赴任の旨を打電した。早くも五月二五日の『日布時事』は、「原田博士布哇大学教授就任承諾」の見出し記事で、「同博士は帰朝後諸方面に打合せを為したる結果、此れを承諾する事と為り今朝ディーン総長に宛て電報し来れり、同博士の電文に依れば、来布期は確實ならざるも新学期開始迄には勿論家族同伴来布する由なり。同博士がオアフ大学に入るは、独り同大学の爲めならず、各地日米問題の上に、一大好結果を齎す可しと察せらる」と報じた。さらに五月二六日には、ハワイ大学で日本歴史と日本文学との講座を担当し、課外教授として日本語も教えると伝えた。そして、原田の略歴を詳細に記し、原田の来布は、当地日米親善の上に資するところ甚大であると、その期待を顕わにした。

原田は、ハワイ大学より招聘があったことを国際連盟事務局次長の新渡戸稲造の秘書として赴任した長男健にも知らせた。その結果、一九二〇年六月二日付で、健はロンドンから書簡を原田に送り、次のように記している。

昨朝布哇よりの最後の父上の御手紙有難く拝見致しました。布哇大学に招聘方申出がりましたがそれに付ては予てミス・デントンから一寸伺ったことがありましたが慎重御考慮を煩したいと存じます。それと申すのも数日前新渡戸博士と午餐中博士は自分の後任者としては将来父上を推薦したいと思つて居る。色々と考えても今のところでは父上の外に適任者を認めないとのことであります。……(中略)……

故に私としては父上が日本との連絡を御絶ちにならないように御留意願いたいと存じます。これが私の唯一の希望でこの希望が叶えられるなれば如何なる事業に御従事下さつても結構だと存じます。現代は国際的人物を要することは非常に切実でありましてこの意味で父上が全く自由な御身体を持されるのが最も大切と存ぜられます。⁽²⁸⁾

この健の書簡で注目すべきことは、原田のハワイ大学招聘の話は、「予てミス・デントンから一寸伺ったことがありました」と記していることである。原田がロンドンで新渡戸に会い、新渡戸から健を秘書官として採用したいと申し出られたのは、一九一九年一月一七日である。健が京都府庁を辞め外務省事務官となり在官のまま、ニューヨークに向つて出発したのが二月下旬であるから、この間に健はミス・デントンから、原田のハワイ大学よりの招聘話があることを聞かされたものと思われる。

一九一九年にハワイ大学の総合大学として拡張することが、準州議会で決定したことから、ハワイ大学では教授陣の充実を計っていた。日本人移民が多く、人口の約四割を占めるハワイの大学として、ディーン総長は日本人教授の招聘を考えざるを得なかつた。ハワイ大学理事のキャッスルにも相談したと思われる。そんなときキャッスルはハワイ伝道百年記念祭委員会の委員長に就任した。日本にいたスカッター博士が、委員会の主任幹事として八月にハワイに帰つてきたことから、水面下でその人選をはじめた。そして知人の同志社女学校のミス・デントンとも連絡をとり、

意中の人として原田の招聘を考え、ディーン総長に推薦したのである。このような時点で、健はミス・デントンから話を聞いていたと考えられる。キャッスルとスカッターは、一月中旬、アメリカ本土を講演旅行中の原田に、一九二〇年四月一日から一九日まで開催されるハワイ伝道百年記念祭の連合礼拝に説教を担当するよう勧誘を行ったのである。その上で四月二日、ハワイ大学総長ディーンと原田との会談のとき、正式にハワイ大学教授就任の招聘となったといわざるを得ない。

三 排日問題と日米関係委員会

原田は、一九二〇年五月二三日にハワイ大学よりの招聘を受諾し、八月末赴任の旨を打電したが、その後様相が一変する。『原田助日記』の五月九日の条に、「桑港日本人会書記長千葉豊治氏来訪、予に渡米の上日米問題の為に尽力せんことを懇誘すること切なり」と記されている²⁹。これに対応する千葉の『日本滞在中の日記』は、五月一〇日となり一日の違いがあるが、「数日前米国より帰京されたる前同志社社長原田助氏を訪問、学者・宗教家を中心としたる排日緩和方法に関して懇談す、……此日東京渋沢男爵より東電あり、即夜帰京す」と記し、五月一日の早朝、千葉は渋沢事務所を訪問している。千葉は当時、カリフォルニア州の中央農会専務理事で、三月初に帰国し、カリフォルニアにおける排日運動の現況、在留邦人の農業活動、経済大恐慌による金融事情などを政界・財界に訴えていた。千葉はすでに四月二四日と五月一日にわたり日米関係委員会の渋沢栄一と会い千葉が著述した「米国ニ於ケル排日問題ノ内容及之レカ善後策私案」を提出し、渋沢を通じ原敬首相にも提出していた³⁰。すでに千葉と渋沢の間で、原田を日米関係委員会の代表として、アメリカへ行ってもらうことを打診してみようという、相談がなされていたのである。

う。しかし、すでに原田は五月二三日に、ハワイ大学へ招聘受諾を打電している。

原田は六月七日に東上し、病床の渋沢と面談し、排日問題について二時間にわたって話し合い、その席上渋沢から日米関係委員会を代表して渡米するよう強く懇願された。原田はハワイの約束があるので辞退すべきと思うが、折角の勧誘なれば、なお一考すると答えて別れた。その日に千葉は、阪谷芳郎を訪ね、原田派遣の件を協議しており、六月二四日には千葉は渋沢・阪谷と面談し、次のような「宗教家ヲ米國ニ派遣スル件」という意見書を提出した。

宗教家ヲ加州ニ派遣スルコトハ、目下排日反対運動ヲナシ居ル加州ノ新教牧師団ト協力呼応スベク、又邦人ノ人心安定ノ為メ最モ必要ナレトモ、其人選宜シキヲ得ルコト肝要ナリ、ソノ人物ハ日米問題ニ対シ理解力ヲ有スルコト、米人間ニ知己ヲ有スルコト、英語ニ熟達シ至誠人ヲ動カス篤実ノ士タルコトヲ要ス

日米関係委員及ビ基督教會同盟ニ於ケル宗教家派遣ノ議アルヲ以テ、人選ハ其等団体ニ任スル方可ナラン(以下略)⁽³²⁾

原田は、このような条件をすべて満たしている国際人であり宗教家であり教育者であった。渋沢・阪谷・千葉は、原田以外に適当な人物はなく、再度懇願することを決め、六月二九日に日米関係委員会を開催し、加州排日問題を何んとか応援すること決めたのである。そして六月三〇日に渋沢は再三にわたって千葉と協議を重ね、原田にお願いするより方法はないとして、渋沢は七月一日付の書簡を京都の原田に送ったのである。原田は書簡を読み七月四日に東上して渋沢と面談した。『原田日記』には次のように記している。

急電に接し東上、渋沢子爵を訪ふ。子爵は日米関係委員会の重なる者及び原首相は全く同感なるを以て是非共渡米を依頼したしと述べられる。予は(一)布哇に先約あれば成るべく辞退したきこと。(二)若し他に適任者なしとなり布哇大学に於て子の就任を一月まで延期するを快諾するに於ては諾すべし。(三)其場合子の使命を覚書として明記を乞ふことを述べ。子爵の熱烈、國家を思ふの誠意に感動措く能はず、次で阪谷男爵、金子子爵を訪ふ。共に子の渡米を勧誘すること切なり。⁽³³⁾

渋沢はかねてより日米問題、とくに排日論に対抗するためには、国民外交が必要であると考えていた。一九一五年

一月〜二月のサンフランシスコで開催されたパナマ運河開通記念万国博覧会に出席のため渡米した際に、サンフランシスコ商業会議所会頭ウォーレス・M・アレキサンダー (Wallace M. Alexander) から、常設の日米関係委員会 (Japanese-American Relations Committee) の設立を呼びかけられた。すでにアレキサンダーは日本関係委員会 (Japanese Relations Committee) を組織していたのである。お互い協力して常設の委員会で日米民間外交を展開しようという提案に渋沢は共鳴した。帰国後、渋沢は中野武営らと協議のうえ、一九一六年二月二日にアメリカ側に対応して、二四名以内の会員をもって日米関係委員会を設立した。その目的は「日米両国ノ親善ヲ永遠ニ保維スルタメ、常ニ両国民ノ情意ヲ調和融合セシメ、時ニ紛議ヲ生ズルコトアレバ、之ガ解決ニ勉ムル」ことであった。委員会は、この目的のため、日米親善の強化をはかり、人脈と情報の交流を推進していった。委員には日本を代表する経済人・知識人が名を連ねている。³⁴⁾

一九二〇年の委員会の目的は、当面排日土地法の撤廃を実現するために、日米両国の政府関係者や実業人・有識者に働きかけることであった。その一つとして四月二四日から五月一日まで、ニューヨーク日本協会会長のフランク・A・バンダーリップ (Frank A. Vanderlip) を団長とする大西洋岸の一行一二名が来日し、日米関係委員会との間で日米問題解決案を協議していた。日米関係委員会は、当面の緊急課題がアメリカ本土に代表派遣であるため、原田の申し入れた条件の確保に尽力した。ハワイ大学総長への電報の件は、渋沢から「賢台之加州行を小生より依頼之義へ、もしも其電報が新聞紙等にて誇大ニ吹聴致候虞無之候哉、可相成ハ別紙草案之如くして、賢台より御打電被下候方、幾分か穩当ニ相聞ヘ可申と存候」(七月一六日)との書簡が届いた。そして七月一九日の日米関係委員で、諸事決定次第お知らせするとの内容であった。その電報案は、次のようなものである。

今回渋沢男爵ノ懇懇ニ依リ、重要ノ任務ヲ帯ヒ數ヶ月滞在ノ予定ニテ米國本土ニ赴クニ付、貴大学ニ於ケル小生ノ開講期ヲ一

千九百廿一年一月以後トセラル、様、御承諾ヲ得タシ、尚小生ハ家族同伴ニテ天洋丸ニ乗船、九月二日貴市到着ノ予定ナリ、御返電マツ

原田は、自らハワイ大学総長に電報を打ち、総長から受諾の返電あれば、任務を引き受ける覚悟を決めた。この多忙な時期の七月二四日、長女芳子と同志社大学神学部教授片桐哲との結婚式が行われた。片桐哲は、仙台組合教会牧師片桐清治の長男であった。原田と片桐は同時期に同志社神学校で学び、一八八一年五月一日に、京都第二公会でゴルドンから同時に受洗した間柄である。結婚式は、網島牧師司式のもと京都市公会堂で行われた。³⁶

丁度その頃、ハワイのマキキ教会牧師奥村多喜衛が、第八回世界日曜学校大会に出席するため来日していた。『原田日記』では省略してあるが、奥村の『楽園時報』によれば、七月二六日東京で会い、二七日に原田と相携えて渋谷に会ったことになる。奥村は次のように記している。

七月二十四日に横浜に着し、二十五日東京に入つて、其翌日原田博士に出会ふた。博士は当時ハ釜しくなつていつた加州の排日問題につき、日米関係委員会から桑港出張を頼まれたが、布哇大学へ赴任の理由で再三辞退しても聞かれないので、余と相談の上決定せんと、余が帰着を待ちうけて居る所であつた。二十七日には博士と相携へて渋沢子爵を訪ひ博士の桑港を取り決めた。³⁷

これによると、原田は奥村と最終的に相談して決定したことになっている。『原田日記』は省略してあるので、この問題については奥村の名前は出てこない。原田は奥村に今までの経過を説明し、最終的にハワイ大学総長の返事がないので迷っていることを告げたものと思う。渋沢に会ったときには、ハワイ大学の承諾があり次第引き受けると言明したのであろう。七月二九日の『原田日記』は、「渋沢子爵より来電、布哇大学総長の承諾を得たるを以て渡米を正式に依頼し来る。仍て来る八月三日の送別会に出席を諾す」となり、総長より正式に受諾の電報が来たので、渋沢

に連絡して正式依頼となったのである。渋沢の秘書増田明六からの原田宛書簡には、「布哇大学総長ヨリハ意外ニ早ク返電有之、併カモ快諾ノ旨申参ラレ、渋沢男爵ニ於テモ大ニ安心セラレ居候」(七月三十一日)とある。³⁸ ハワイ大学総長デインも、日米親善のため原田の任務の重大さを認めたりえの快諾であった。

一九二〇年八月三日の日米関係委員会記録には、次のように記されている。

当委員会ハ、文学博士・神学博士原田助ヲアメリカ合衆国カリフォルニア州ニ派遣シ、同地方ニ於ケル排日緩和ヲ講ゼシムルコトトナリタルニヨリ、是日、同人及ビ千葉豊治ノ送別会ヲ東京銀行倶楽部ニ開ク。同時ニ、同国ハワイニ在リテ日本人第二世啓蒙運動ニ従事セントスル牧師奥村多喜衛ヲ招キ、其説ヲ聴キテ賛意ヲ表ス。³⁹

原田は家族同伴で八月二四日天洋丸で横浜を出港したのであるが、すでに『日布時事』(一九二〇八月二〇日)には、「日本で重大視さる／米国の排日／正論喚起の運動／原田博士は布哇大学教授就任を延期し渡米運動決定」という大きな見出し記事が掲載された。これはハワイ大学の発表ではなく、原田の渡米を強く懇願した千葉が、一船早く西伯利丸で帰米する途中、ホノルルに寄港したさいに新聞記者に発表したものであった。

原田は一九二〇年九月三日に家族とともに、天洋丸で来布した。『日布時事』(一九二〇年九月四日)は、「屢々報道した如く原田博士は来るべき新学期より布哇大学に入る筈であったが、大陸に於ける日本人問題視察の爲め此れを変更、来る廿八日の春洋丸で渡米し本年十二月一旦日本に帰つた上、来春一月再び来布し其より愈々大学に講師となる事となつた」と紹介し、博士は謙遜な態度を以て語るとして、原田の談話を次のように記している。

私の渡米は排日緩和の宣伝運動が目的ではなく、唯単なる視察に過ぎない。加州の排日問題に就ては我国でも非常に論議されて居る然し此の問題は日米双方の誤解が因を爲して居るもの、即ち日本では加州の排日は此米国人全体の意向であるとして大勢の同胞が非常に侮辱されて居るものと思ひ、又米国の方では日本人は仲々野心満々でドンナ考えを抱いてゐるか解らぬと云ふに

ある。私の感ずる所では今日此問題の事で両国間に事件を惹起するような事はないが、此れを此儘にして置くと将来諸種の点に不利を招く事は明白である。此れを防止するには是非共日本国民の眞の叫を先方に通じ又先方有識者の意向を叩いて其間にある誤解を一扫するの外はない。此の意味に於てヴァンダリッブ氏一行の日本訪問は双方に頗る好結果を齎した。其れで私も幸ひ大陸に渡る機を得たので、先づ米国人にして日米親善に同情ある人併せて其他の主なる人士に面会して其の意向を聴いて見ようと思ふ。加州現下の形勢を以てすれば排日案は通過するに違いない。果してそうであればドウすればいゝか、此点も大陸の人々と逢つてよく考へて置かねばならぬと思つてゐる。⁽⁴⁰⁾

少々長くなつたが、原田の渡米前の心境であるが、高ぶることなく冷静に問題を視てゐるといへよう。

原田は一〇月八日にサンフランシスコに到着、学者・教育家・宗教家・政治家等の知名の士と会見し、東海岸の都市を巡回し、十一月二日の一般投票の日まで加州に滞在、翌日から東部のシカゴ・ボストン・ニューヨーク・ワシントン⁽⁴¹⁾を巡回、一二月に入り加州に帰り三日にサンフランシスコから帰国の途につえ、九日にホノルルに寄港して一月二〇日に横浜についた。原田は二一日と二二日に渋沢に會つて報告をし、「米国加州排日問題調査報告」書を提出した。二二日の夜は、銀行クラブで日米関係委員会主催の歓迎會に臨んだ。日米関係委員会は、この日、原田と山田三良（東大教授）を會員に推薦した。⁽⁴²⁾原田は海外在留者として、はじめての日米関係委員会の會員となつたのである。食後原田は、渡米視察報告を行つた。

一二月二七日に日米関係委員会は、都下の新聞通信社の代表者を招待して、原田助渡米視察報告會を開催した。二八日付の各新聞は、原田の視察談を掲載した。すでに、原田がホノルルに寄港したさいに、一二月九日付の『日布時事』には、「新移民法は欧州移民が目的／米人の開發も必要だが日本人自身も欠陥を改めよ／原田助博士の大陸談」⁽⁴³⁾と掲載されている。日本では、一二月二七日の報告會に先だつて『万朝報』は、原田が横浜に帰港したときにインタビューをし、一二月二一日の新聞に視察談として、次の談話を掲載している。

△去る八月末渡米し、各地の名士と会見、排日問題に就いて互に意見の交換を行った所、思ひの外排日案反対の声が高く、二十万人も反対者があつた。

△不幸にして排日案は通過したが、前回と違って暴行脅迫する者は無く、日本人側も飽迄紳士的態度であつた。将来排日案が如何に成行くかは疑問であるが、移民制限を実施すると共に、在米日本人にも相当の保護を加へる事と思ふ、併し

△移民の渡航も排日案も同じ事を繰返す位で、却々片付きはしまいと思ふ。日本人は今少しく日本の国情を米国人に宣伝すると共に米国の事情を研究する必要がある、今度布哇大学に東洋科が出来て日本の歴史及文学等を教授する事になった、私は△講師として再び布哇に赴く事になってゐる、近々は支那人の講師も招く筈であるさうな、米国人が最近東洋地方研究に従事するやうになつた事は、将来日米兩國提携の上に効果ある事と思ふ。

原田は二月二七日の渡米視察報告会が終ると、慌しく翌二八日の横浜解纜のコレア号でハワイへと赴いたのである。かくして、原田は一九二一年一月よりハワイ大学教授として、日本歴史・日本文学・日本語の科目を講義することとなつた。

原田がハワイへ赴任したあと、一九二一年一月三日の『基督教世界』には、原田助の執筆した「米国における排日運動の真相と其の解決策」が掲載された。⁴⁴さらに一九二一年二月には、原田助著『米国加州排日問題調査報告』(五五ページ)が、日系関係委員会刊として刊行され、関係方面に配布されたのである。この報告書は、加州の外国土地所有法案の概要と排日運動の事実経過をのべ、主要部分は原田が行つたアメリカの代表的人士(一一一名)と、加州在留邦人の代表的人士(四八名)のアンケート調査の分析に当てている。⁴⁵ここでは分析の結果の説明は省略するが、いずれにせよ、原田は日米関係委員会の委嘱を受け、アメリカにおける排日運動の視察・調査分析を行ったことが、その後のハワイ大学教授としての原田に、大きな糧を与えたことは明らかである。

四 ハワイ大学と日本学

ハワイ大学は、一九〇七年に連邦土地供与法(Land Grant Act)によって「農工科大学」(College of Agriculture and Mechanic Arts of Territory)として創立された。Land Grant Act (Morril Act) は、一八六二年の南北戦争中、連邦政府に忠誠な国会議員のいる州にのみ、農科大学を設立するため三万エーカーの土地を連邦政府が供与する法律である。この法律の適用を受けて六九の州立大学が誕生した。

その後一八九〇年には、Land Grant Act によって設立された州立大学には、連邦政府から国庫から補助が与えられるようになった。ハワイもハワイ王国が倒れたのち共和国となり、アメリカと合併して、ようやくハワイがアメリカのテリトリイ(準州)をなつた一九〇〇年六月より、この法律の適用が受けられることになつたのである。そして、ハワイでも大学創立が準州議会で検討され、一九〇七年三月二五日に準州政府が認可し、同年九月一四日にマッキンレー・ハイスクール構内の一建物を仮校舎として開校するにいたつた。

当初この仮校舎で、学生五人に、教授陣一二人という陣容で発足したが、一九一一年には布哇(ハワイ)大学(College of Hawaii)と改名し、翌一九一二年の九月に現在地のマノアに新校舎を建設して移転したのである。⁴⁶ ハワイ大学は、主に適用科学に力を入れた単科大学であったが、太平洋の中心に位置するハワイの繁栄にともない、世界の関心が高まるにつれ、次第に学生数も増加してきた。そのため、単なる応用科学のみならず、生活と密接な関係のある文学・美術・医学その他社会的活動に適する青年男女の養成の必要に迫られてきた。一九一九年にいたつて準州議会は、従来の農・工を中心とした単科大学に加えて、文科大学(College of Arts and Sciences)を増設すること

を決議した。そして準州政府は、一九一九年七月一日をもって、総合大学として名称も University of Hawaii と改めて発足させたのである。

ハワイ大学は、アメリカから毎年五万ドルの国庫補助と、ハワイ準州からその時々必要に応じ準州議会の承認を受けて資金の補助を受けて運営されてきた。本校はマノア谷に位し、その土地は校庭・農園・牧場とそれぞれの用途に充てられている。この外に A・P・クックの寄贈になる運動場が校舎の近傍にある。そして総合大学として発足するに当り、一九一九年の準州議会は、ワイキキにある水族館をハワイ大学の研究場にすることを決め、それと同時に、C・M・クック財団が同所に研究室建設費として、一万ドルを寄付したのである。

総合大学となったハワイ大学は、応用科学大学 (College of Applied Sciences) と文科大学 (College of Arts and Sciences) からなる。応用科学大学では、(一) 農科 (二) 土木工科 (三) 製糖工科・製糖農科 (四) 家政経済科 (五) 理科の五科からなり、卒業生は理学士 (B・S) の学位を授与される。文科大学では、(一) 文科①歴史・経済・社会学科②語学・文学科③自然科学科④教育学科 (二) 商科 (三) 医学予備科 (四) 音楽科からなり、卒業生には文学士 (B・A) の学位が授与される。学生は、本科生・選科生・研究科生からなり選科生は学位号を授与されない。また研究科生には修士号、マスター・オブ・サイエンス (M・S)、マスター・オブ・アーツ (M・A) が授与されることになった。⁴⁷

総合大学になる直前のハワイ大学の日本人学生は、一九一九年六月現在で一八名にすぎなかった。内訳は、四年生三名、三年生四名、二年生六名、選科生五名で、全員男子学生のみであった。総合大学になり文科大学が増設され、語学・文学科の日本歴史・日本文学と日本語は、元同志社総長原田助博士が担当することになり、日本人学生の増加が期待された。一九二〇年九月一三日に総合大学としての新学年が開始され、入学生は八五名になり、うち日本人学

生は十余名が入学した。当時の教職員数は二四名であった。⁽⁴⁸⁾

『日布時事』（一九二〇年九月二三日）が報じた当時のハワイ大学在籍者は、一四五名で人種別にみると次のようになる。⁽⁴⁹⁾

日本人 三九名、支那人 五五名、土人及半土人 一四名、朝鮮人 五名、比島人 一名、雑種 三二名 計一四五名。

『日布時事』は、さらに「支那人尤も多数を占め居れるは支那人父兄が如何に子女の教育に意を注ぎ居るかを示めす有力なる証左にして布哇人口の半数を占むる日本人の高等学府に通ふもの僅か三九人に過ぎず此の点は日本人父兄の多いに支那人に学ぶべきところなり。」と論じている。

原田は、一九二〇年九月三日、天洋丸で、夫人佐喜子および美佐尾（一九歳・三女）、淳（一八歳・三男）、美也子（一一歳・五女）、修（六歳・五男）を伴って来布して、家族は、フォート街ブレイスデル・ホテルに投宿していた。⁽⁵⁰⁾しかし、前述のように原田が九月二八日の春洋丸で、日米関係委員会より派遣されて、アメリカ本土の排日問題調査のため渡米したため、マキキ教会奥村多喜衛牧師の奥村ホームで生活をするようになった。なお、原田が任務を終え再度来布する一九二一年の一月までは、日本歴史・日本語の担当は、原田に代って奥村多喜衛牧師の長男でエール大
学出身の奥村梅太郎が授業を行うことになったのである。

総合大学となったため、ハワイ大学が教授陣の充実を計り、原田という日本人教授を獲得したと同じように、支那人教授の招聘のため種々運動をしたが、適当な人物を得ることができず、九月の開講には間に会わなかった。しかし、『日布時事』（一九二〇年九月二三日）は、「支那人教授ワン博士招聘」の見出しで、「布哇大学文科の支那文学歴史科の講師として上海在住のテン・マ・ワン博士を招聘することとなり既に同博士の許諾を得て来る十二月一日来任する予定になり居たるが多分第二学期より講話を初むべしと云ふ、同博士は支那共和党を代表して巴里の平和会議に

出席し来往の途次当地に寄港したる人なり」と報じた。

原田は一〇月八日、アメリカカリフォルニア州の排日問題調査のためサンフランシスコに着き、日米有識者と会見、ワシントンに赴き駐米大使幣原喜重郎から日米両政府の交渉顛末を質し、再度サンフランシスコに帰り調査を行った。そして二月二〇日横浜に着き、翌日、日米関係委員会に『米国加州排日問題調査報告』を提出し、一週間日本に滞在のち、一九二一年一月からハワイ大学の講義に間に合うようにハワイへ帰ってきた。

原田は、ハワイ大学で一月から日本語(週三時間)、日本文学(週二時間)、日本歴史(週二時間)の講義を担当した。受講生が最も多いのは、日本歴史で二〇名で、日本人・アメリカ人、中国人その他種々の人種がおり、女子学生も数人まじっていた。講義の内容は、日本近代史で一月から二月は、ペルー提督来日時代から明治維新の変遷を話している。日本文学は、一〇名でアメリカ一名を除いてはすべて日本人学生の受講で、徳富蘆花の『自然と人生』を教科書に使用した。日本語は、一五名で中国人九名、アメリカ人五名、朝鮮人一名の受講である。原田は、日本語受講で熱心さと努力の点では、中国人よりもアメリカ人の方が優れているが、やはり成績では中国人が良く、同文と同等思想には争われないものがみえると感想をのべている。⁶¹原田の講義は、三科目合わせて受講生四五名で、これが、その後一二年間に及ぶハワイ大学教授としての最初の講義と受講生であった。

国際人原田のハワイ大学教授就任は、当時のハワイ日系人社会にも大きな影響を与えたのみならず、日米親善の観点からハワイ在住のアメリカ人社会にも歓迎された。当時ハワイを起源にして、太平洋海域における環太平洋諸国の個人および組織を巻き込んでいった二つの国際主義運動にも、原田は大きな貢献をした。

その一つは、アレキサンダー・H・フォード(Alexander Hume Ford)が提唱し、一九一七年にハワイ準州知事を会長に結成された汎太平洋同盟(The Pan-Pacific Union [PPU])である。汎太平洋同盟は、一九二〇年より汎

太平洋諸国の代表を集め、各種の汎太平洋会議をホノルルで開催していた。原田は日本代表として、第一回汎太平洋教育会議（一九二一年八月）、第一回汎太平洋商業会議（一九二二年一〇月）、第一回汎太平洋教育開拓保健会議（一九二七年四月）等に参加している。

もう一つは、ホノルルYMCA会長フランクリン・アサートン（Frank C. Atherton）が中心に結成された太平洋問題調査会（The Institution of Pacific Relation [IPR]）である。太平洋問題調査会は、太平洋諸国のあらゆる問題を科学的に調査研究し、永続的な組織のもとに隔年毎に太平洋会議を開催し、太平洋上における非公式の国際連盟の観を呈していた。原田はその結成準備段階から参画し、ハワイの太平洋問題調査会の唯一の日本人正式会員であった。ホノルルで開催された第一回太平洋会議（一九二五年六月～七月）では、日本代表として参加し開会の祈禱をしている。ホノルルの第二回太平洋会議（一九二七年七月）でも日本代表として参加し、京都で開催された第三回太平洋会議（一九二九年一〇月～十一月）では、ハワイ代表として出席している。⁽²²⁾

さらに、一九二三年六月サンフランシスコで開催された世界教育大会にも、外務省より依頼を受け日本代表として参加したのである。また、一九二六年九月から一二月まで、日本・朝鮮・満州・中国の講演旅行を行っている。このような、原田のハワイ時代の社会的・国際的活動の詳細については、改めて稿をおこしたい。

ところで、原田は家族同伴でハワイ大学に赴任してきたのであるが、一家はセントラル・ユニオン教会に所属していた。原田は、ハワイ日系人社会の知識層や指導者たちとの交流を重ねていた。来布一年後の一九二一年一〇月一七日には、三女美佐尾（同志社女学校卒・東京女子大中退）が、ハワイ日系人社会の元老で布哇日本人聯合協合理事長毛利伊賀の長男元一（東大医学部卒・医師）と結婚している。⁽²³⁾ 媒酌人は『日布時事』社長相賀安太郎夫妻であった。結婚式はセントラル・ユニオン教会で、ポール・堀貞一両牧師の司式で、知事ファリントン、ハワイ大学総長デー、

総領事矢田長之助など約一、〇〇〇人の参会者で盛大に行われている。

原田は、赴任当初は両三年ばかりハワイに在在するつもりであったが、この時点で長い期間のハワイ在在を覚悟したものと推察できる。⁵⁴ 原田は赴任当初は、奥村多喜衛牧師の奥村ホーム女子寄宿舎に居住し、その後マノア、カイクなどに転宅していたが、一九二四年八月からロッキーマン・ヒルの大学から数分のところに居を構え、一九三二年のハワイ大学退職まで、そこに居住した。ワイキキとダイヤモンド・ヘッドの一望できる絶景の場所であった。日本・外国の賓客の招待会場としても使用し、この家は国際親善の友好の場所ともなったのである。⁵⁵

ハワイ大学も原田の就任後、日系人学生も増加し、のちに原田は一九二七年から東洋宗教学史の授業も担当した。学生数の増加と原田の国際人としての活躍の多忙さもあり、一九二九年九月よりハワイ大学ではもう一人の日本人教授の採用を行った。丁度原田が、一九二九年一〇月に京都で開催される太平洋問題調査会の第三回太平洋会議にハワイ代表の一人として参加することになったため、国友忠夫が教授として採用された。

国友は、青山学院を卒業後、YMCA事業に従事しシベリアに出張して軍隊慰問を行ったのち、アメリカのオベリン大学に入学し、一九二三年六月にオベリン大学神学部を卒業して、ハワイ伝道会社の招きで来布、マウイ島のブネネ教会牧師となる。さらに『日布時事』記者を経て、一九二五年、マッキンレー・ハイスクールに日本語科を創設し日本語を教授していた。一九二六年六月に同志社出身のハワイ島ヒロ教会牧師樋口貫の長女亀寿（オベリン大学音楽科卒・ピアノリスト）と結婚し、ヒロを中心に伝道活動に従事していた。国友はすでに、ロビンソン原著・国友忠夫訳『パウロ伝』（四〇〇ページ）を一九二六年四月に東京・文川堂から出版している。⁵⁶

一九二九年九月の新学期では、日本関係科目の受講生は一二〇名にもなり、五科目の講座に分かれているが、受講希望者が多くいるにもかかわらず、受講者を制限せざるを得ない状態であった。五科目のうち最もポピュラーな

は「日本歴史」で、大部分は日本人以外の外国人学生で占められていた。上級の「日本古典研究演習」では、『万葉集』や『古今集』などの古典を教授している。原田と国友は、一九三〇年二月に、共著で *Introduction to Colloquial Japanese, University of Hawaii, 1930, 105P.* を出版し、日本語会話入門の教科書として使用した。国友の教授就任により、原田は日本語の担当は国友にまかせ、日本歴史・東洋宗教学史・日本近世史・日本文学史の担当となったのである。国友は一九三七年までハワイ大学教授として在任している。

また原田は、日本学の充実のためカーネギー財団の後援により日本から客員教授を招聘した。その最初に一九二八年度と一九二九年度の二年間にわたり、同志社ハリス理化学校助手ののちジョンズ・ホプキンス大学・エール大学で学んだ理学博士中瀬古六郎が客員教授として赴任したのである。原田の退職後、二人目として一九三三年度に東大教授 授蟻山政道が招聘されている。⁵⁸⁾

ところで、原田のハワイ大学教授として最後の学年になった一九三一年九月二十六日に、原田はジュネーブの国際連盟事務局にいた長男健宛に書簡を送り、ハワイ大学の現況を次のように記している。

当大学も新学年初まり多忙となった。新学に年は七百余名の申込の内四百三十五名入学し、全体の学生は約二千名に達し十年前とは大変な相違である。予の本学年の日本歴史科には約四十名、東洋宗教学史は五十名、後者は数名の日本人を除き他は外国人である。日本近世史と日本文学史は共に十名づつの少数である。⁵⁹⁾

ハワイ大学が単科大学から総合大学に昇格し、原田がハワイ大学教授として招聘を受け、一九二〇年九月の入学者八五名、学生在籍者数は一四五名、教職員数は二四名であった。そして、原田が一九二一年一月から講義を担当した科目の受講生は、「日本歴史」二〇名、「日本文学」一〇名、「日本語」一五名計四五名であった。

一一年後の一九三一年九月の入学生四三五名、学生在籍者約二〇〇〇名、教職員数は一〇〇余名となった。原田の

担当した科目の受講生は、「日本歴史」四〇名、「東洋宗教史」五〇名、「日本近世史」一〇名、「日本文学史」一〇名、計一一〇名という増加ぶりであった。また、一九三一年の夏期大学には学生が六〇〇名にも達し、原田は「東洋宗教史」を講じている。

五 教え子の日系人学生たち

ハワイ大学教授としての原田は、常に学生を愛し、学生からの信望も厚かった。毎年日系人学生の卒業生を自宅に招き、卒業パーティーを催し門出を祝していた。また、サンデー家庭会などを催し自宅を開放したりもした。さらに、一九二五年からは『日布時事』社長相賀安太郎と計り、ハワイ大学在学中の日系男女学生らで「日本語研究会」を組織させ、原田・相賀が顧問となり指導者となって、毎月一夜交替に両家を開放して例会を継続していた。毎回数十名の学生たちが例会に参加し、日本語の勉強と社交の場となっていたといわれる。⁶⁹

このように、ハワイ大学に日系人学生が多く入学するにつれ、優秀な日系人学生が原田の週辺に集まるようになった。ここで、原田と関係の深いハワイ大学の教え子の日系人学生若干名について記述しておこう。

先ず特筆すべきは、坂巻駿三である。坂巻は、弘前出身で一八八六年渡米した坂巻銃三郎（ハワイ島オーラア砂糖キビプランテーションの通訳）の三男として、一九〇六年に生れた。父銃三郎は、日本メソヂスト教会牧師であった山鹿旗之進（山鹿素行の家を継ぐ末孫）と従兄弟になる。駿三は一九二三年六月にヒロ高校を卒業して、九月にハワイ大学に入学してきた。原田は坂巻がハワイ大学入学前に知る機会があり、その学力・弁舌の優秀さを高く評価していた。それは、ハワイ排酒店同盟会主催の準州下各高校生徒代表者による禁酒問題弁論大会に、来賓として出席した

ときである。一九二三年一月一四日、伝道記念館で、八名の各校選抜弁士により開かれ、坂巻はヒロ高校より選抜され、「米国は何故禁酒国になったか」の演題で雄弁を振るつた。そして見事に優勝し、ファールリントン知事、ドール、フリーアー、カーター、マッカーセーの各前知事提供の賞金一〇〇ドルを獲得した。審査の結果は、論旨の正確なること、英語の正確なること、演説振の巧妙なることなど、他の弁士を抜きんでいるとの評価を受け、ファールリントン知事より賞金一〇〇ドルを授与されたのである。⁶¹

坂巻はハワイ大学文科に入学後、ます／＼頭角をあらわし、ハワイ大学学生機関誌の主筆となり、また学生強制軍事教練反対運動のリーダーとして活躍した。さらに一九二四年九月一八日のヤングホテルで開催された汎太平洋同盟主催のバルボア・デー晩餐会の席上、アメリカ・オーストラリア・カナダ・中国・日本・朝鮮・比島・ハワイの有識者による各国代表者演説にまじって、ハワイ大学二年生の坂巻が、「日本が現代国家としての歴史に最も重要な出来事」と題し演説をした。これは、汎太平洋同盟が、「太平洋の一国に於ける歴史的出来事」のテーマのもとに募集した懸賞論文で、一等賞に当選した論文である。バルボア・デー晩餐会の席上、賞品授与をうけ演説したもので、出席者三〇〇余名の絶賛を博した。⁶²

坂巻は、ハワイ大学演劇部 (Dramatic Club) でも中心的な役割を果たす。ハワイ大学演劇部は、イギリス人ジョン・マセフィールド (John Masefield) 脚色の英語劇「忠臣蔵」(The Faithful) を、一九二四年一月二八日・二九日の両日にわたり、ハワイ伝道会館で昼夜二回づつ上演している。登場人物は全員ハワイ大学日本人・中国人学生であり、日本人一六名、中国人六名総勢二二人の学生が演じた。⁶³ 服装・所作・舞台は全部日本の歌舞伎と同様の意匠をこらし、たゞ台詞のみが英語である。Y・青木、K・市川の両歌舞伎俳優のコーチを受け練習に取り組んだ。初幕・第一場(浅野侯邸)、第二場(吉良邸)、二幕・お茶屋(大石遊興の場)、三幕・第一場(内蔵之助の屋敷)、第二場(吉

良邸、義士討入りの場)、第三場(泉岳寺、浅野侯墓場前)といった本格的な英語劇「忠臣蔵」で、上演の結果大好評を博し、翌一九二五年にも再上演している。配役は、浅野侯―坂巻駿三、内蔵之助―谷村正人、上野之助―アホン・ウオン、亀井能登守―相賀重雄、勅使―川地健助、吉良家祐筆―坂巻譲治、大石主税―片桐正利などの名がみられる。

坂巻はこのように学生生活をエンジョイしながらも、学業成績は抜群で、一九二七年六月に挙行される卒業式前の二月に学士号(B・A)を授与されるというハワイ大学開校以来の特例措置がとられた。卒業証書だけは、六月に他の卒業生と共に授与されることになり、坂巻は原田助博士・リブリック博士・パーカー教授の指導のもとで、二月から直ちにグラデュエート・コースに進み、修士論文『布哇日本字新聞発達史』の執筆にかかった。⁶⁴そして、一九二八年二月に“A History of The Japanese Press in Hawaii” 1928. mimeograph, を提出し、修士号(M・A)を取ったのである。そして、同志社大学の Student Professor として四月から赴任した。

次に坂巻駿三の兄の坂巻譲治は、銃三郎の次男として一九〇四年に生れ、一九二二年六月ヒロ高校を卒業後、一九二二年九月ハワイ大学に入学した。

一九二四年に日米親善増進のため米国大学代表学生二〇名が、六月二五日ハワイを経由して日本に行くことになり、ハワイ大学から二名の学生が参加することになった。その二名に、坂巻譲治とアドナジー・クラークが大学生会議で決まり派遣されることとなった。これはディーン総長・原田教授などの推薦にもとづくものであった。学生会議で費用として三〇〇ドルを募金し、他はハワイ大学キリスト教青年会が補助することとなったのである。一行は日本の各地を巡歴して友好を温め、八月三〇日に帰布した。⁶⁵米国学生代表団が、御殿場のYMCA夏期講習会を訪れたとき、譲治は、ハワイの話を英語でしたのを、近況兄弟社のヴォーリスが流暢な日本語で通訳した逸話がある。⁶⁶ハワイに帰った譲治は、一月二八日・二九日のハワイ大学演劇部の英語劇「忠臣蔵」に駿三とも出演している。

当時、ハワイのYMCA関係者の間で、太平洋沿岸諸国のYMCA主事を集めて汎太平洋YMCA会議を開催しようという動きがあり種々な経過があつて、一九二四年九月になつて、一九二五年七月一日～一五日まで、ハワイのホノルルで「太平洋諸民族の諸問題に関する会議」が開催されることになつた。その実現のためホノルルに中央執行委員会がつくられ、ホノルルYMCA主事のチャールズ・F・ルーミスを委員長として、アサートン（ホノルルYMCA理事長）、アーサー・L・ディーン（ハワイ大学総長）、原田助、ヤウ・チャン・ヤン、李紹昌（ハワイ大学中国科教授）、アカイコ・アカナ、アンダーソン、ガレン・ローランド・ベーパー・ロマンズ・アダムスなどホノルル在任の有識者で構成され、アサートンが中央執行委員会と全体招聘委員会の議長に任命された。会議の名称は「太平洋問題調査会」と変更されたが、ホノルルYMCA・ヌアヌYMCA関係者は事務局として仕事に追われていた。

六月三〇日より七月一五日まで、ホノルルのプナホー校で開催された会議には、アメリカ、ハワイ、日本、中国、ニュージーランド、朝鮮、オーストラリア、カナダ、フィリピン等の参加国地域から、一二名の参加者があつた。⁽⁶⁷⁾

坂巻譲治は、ディーン総長・原田教授らの推薦により、ハワイ太平洋問題調査会事務局員として、積極的に第一回ホノルル太平洋会議にかかわつたのである。⁽⁶⁸⁾ 譲治は一九二六年六月、ハワイ大学文科を優等の成績で卒業し、翌年六月までウイスコンシン大学大学院で、七月から一九二八年三月までコロンビア大学大学院で修学し、四月から同志社大学の Student Professor として赴任することとなつた。⁽⁶⁹⁾

原田のハワイ大学での最初の直弟子といふべき学生は、川地健助であつた。川地は一八九九年にハワイ島ケアラケクアで生れ、一九二一年六月ヒロ高校を卒業して、九月にハワイ大学文科に入学した。原田がハワイ大学で最初に講義を担当したのが一月であるから、間もなく川地が入学してきたことになる。川地も坂巻兄弟と同じく、一九二四年一月二八日・二九日のハワイ大学演劇部の英語劇「忠臣蔵」に出演している。

川地は在学中原田の指導を受け、一九二五年六月にハワイ大学を卒業し文学士(B・A)の学位を授与された。卒業後、原田の世話でヌアヌY M C A青年部セクレタリーに就任、一九二七年六月まで勤務している。この間、原田と相賀安太郎の提案になるハワイ大学日系学生の「日本語研究会」の世話役として活躍した。しかし向学の念に燃え、原田の推薦によりシカゴ大学神学校に一九二七年九月に入学している。一九三〇年四月にシカゴ大学大学院より文学修士(M・A)の学位を受け、六月にシカゴ大学神学校を卒業し神学士(B・D)の学位を授与されてハワイへ帰国してきた。そして九月から同志社大学の Student Professor として赴任することとなった。⁽⁹⁾

原田の教え子の坂巻兄弟と川地は、学業成績が優秀でともにフレンド平和奨学金(Friend Peace Scholarships)による Student Professor として同志社に赴任している。ここでフレンド平和奨学金の紹介をしておかねばならない。一九二一年二月にハワイ伝道会社の雑誌『フレンド』(The Friends)の一〇周年記念号発刊のため、日本の諸大家の寄稿を集める要務を帯びて、ハワイ伝道会社会計のセオドル・リチャーズ(Theodore Richards)が来日して、リチャードはフレンド平和奨学金の設置を、諸大家に提案した。⁽¹⁰⁾ その趣旨は、日米両国の親善をはかるため、学術品行ともに優秀な学生を選抜し、ハワイ・アメリカに送って四年間研鑽の機会を与え、両国の友好に寄与する人材を育成するというものであった。

日本の諸大家も共鳴し、大隈重信を委員長として、会計は成瀬仁蔵、書記は元田作之進、選考委員は新渡戸稲造とし、政界・学界・財界の有識者を委員として奨学制度を発足させた。委員には原田や海老名弾正も就任していた。当時の金額で三、〇〇〇ドルの奨学金であり、第一回の奨学生として鮎沢厳・柏木隼雄が選ばれた。この制度も一九二七年頃から、フレンド平和奨学金は、ハワイ出身の日系二世の学生たちを日本に送り研鑽の機会を与える必要性を認め、制度の改革を検討するにいたったのである。その結果、ハワイでフレンド平和奨学金の委員会が組織され、ハワ

イ伝道会社日本人伝道部長 F・S・スカッター (F. S. Sudder) を委員長に、ハワイ大学総長 D・L・クロフォード (D. L. Cranford)、ハワイ伝道記念館の T・リチャーズ (Theodore Richards)、ハワイ大学教授原田らが委員に就任した。⁽²⁾

そして、すでに同志社総長の海老名弾正によって実施された、「英語スチューデント・プロフェッサ」(A Chair of Student Professorship of English) で、ハワイの二世大下角一らが同志社のスチューデント・プロフェッサとなつて赴任している実績を認め、同志社へハワイの日系人を Student of Professor として送ることを決めた。かくして、第一回到坂巻讓治(一九二八年四月～一九三〇年八月、同志社高商・予科・大学英文の講師)、第二回到坂巻駿三(一九二八年四月～一九三一年八月、同志社大学英文、予科、女専の講師)、第三回到川地健助(一九三〇年九月～一九三二年八月、同志社高商、大学英文の講師)が、同志社で英語の授業を担当しながら、日本の文化を学んだのである。⁽³⁾ この三人はともに原田の教え子で、ハワイのフレンド平和奨学金委員の原田の推薦があったことはいうまでもない。とくに三人とも同志社の E S S の指導を行ない、同志社の英語教育に大きな貢献をした。とりわけ英語弁論部のコーチとして兄坂巻讓治のあとを引き受けた駿三は、一九三〇年には、一回到行われた全国の個人英語弁論大会で同志社大学の弁士は、一等賞を八人、二等賞を二人獲得させ、また団体の弁論大会でも優勝を飾っている。一九三〇年三月～四月には、同志社大学学生弁士四名を伴つてハワイを訪問し、ハワイ大学の英語弁論大会に参加して好評を博した。同志社からは大工原銀太郎総長、速水藤助教授も同行しているのである。さらに秋には、朝鮮の京城まで英語弁論部を引いて遠征し大成功を収めた。駿三がハワイへ帰国した一九三一年秋には、あとを引き継いだ川地健助が英語弁論部を率いて中国遠征を行ったのである。⁽⁴⁾

原田との姻戚関係になる相賀重雄は、『日布時事』社長相賀安太郎の長男として、一九〇五年ホノルルに生れ、

一九二四年六月ブナホースクールを卒業して、九月にハワイ大学文科に入学した。やはり原田の教え子の一人であった。一九二四年一月二八日・二九日のハワイ大学演劇部の英語劇「忠臣蔵」には、坂巻兄弟・川地らと共演し、亀井能登守を演じている。相賀はハワイ大学二年修了で、一九二六年九月新聞学で有名なアメリカのミズリー大学新聞科に入学した。そして一九二九年六月卒業し、新聞学士(B・J)と八月に文学士(B・A)の二つの学位を授与された。ハワイでは日系人として新聞学士の第一号であった。⁽⁷⁶⁾

相賀は帰布後、『日布時事』に入社し英文編集局に勤務したが、一九三〇年九月、川地と同船で日本語研修のため来日した。当時、同志社大学講師をしていた清水安三宅にホームステイをして、同志社大学に通い日本研究をしていたのである。相賀家と清水との関係は、清水が北京で崇貞学園を経営していたが、アメリカ留学のため北京を去り、渡米の途中ホノルルに寄港したさい、『日布時事』に寄稿したり講演などをし相賀安太郎と懇意の仲で、清水がオペリン大学留学中も、『日布時事』特派員として記事を送信していた。その後、相賀家と清水家は親戚付合であったという。⁽⁷⁶⁾

同志社でハワイ大学時代の旧友、坂巻駿三や川地との旧交を暖めた。一九三〇年一月には、川地と一緒に京都南座の顔見世の観劇に出かけている。相賀はその感想を「南座の顔見世」と題し、一月一六日に『日布時事』に送っている。日本語勉強に訪日している相賀であるため、記者は「日本語で書いて送った通信で原文の儘を掲げる」として掲載された。雁次郎・幸四郎・福助・梅幸などの歌舞伎俳優などについての感想などをのべたあと、次のように記している。

▲私が東京で歌舞伎を見た時も又今度顔見世へ行つて、今更一つつく／＼考へる事があります。

▲それは、私が布哇大学へ入学した頃、すなわちも早六年にもなりますが、よくずう／＼しく忠臣蔵何んかの劇に出演したとの

ことです。

▲しかし、其の経験のおかげかも知れないが、好い芝居を見れば、其の努力と様々な苦辛の真価が解かる気がする。⁽⁷⁷⁾

また、一九三二年三月から四月にかけて約四〇日間、相賀は坂巻駿三とともに、清水安三、近江ミッシヨン理事吉田悦蔵らに従って、朝鮮・満州・中国を視察旅行をするという貴重な体験をした。そして父親の急病のため同志社の Student Professor を辞任した坂巻駿三とともに、七月三一日エム・ジャパン号で一年一〇カ月ぶりにホノルルに帰ってきたのである。⁽⁷⁸⁾

原田のハワイ大学教授として、最後の教え子として上原征生がいる。上原は上原秀政の長男として一九〇五年熊本県玉名郡に生れ、一三歳のときカウワイ島の日本語学校長をしていた父親に呼び寄せられた。来布間もなく父の死去という不幸に遭い苦学しながら日英両学校に通って、布哇中学校で特待生として、一九二三年に首席で卒業した。マッキンレー高校も一九二七年六月に優秀な成績で卒業し、一九二七年九月にハワイ大学文科に入学した。在学中四年間もカイク日本語学校で教鞭をとりながら苦学をし、ハワイ大学四年生のときには、伏見宮奨学資金を与えられ一九三一年六月に卒業した。

上原は老母と二人暮しで苦学しながらも、布哇中学同窓会の幹部として、布哇仏教青年会の中堅として社会的な活動も行った。⁽⁷⁹⁾ 原田とは、キリスト教と仏教という宗教上の違いはあっても、師弟の關係は強く日本文学を専攻したのである。上原は卒業後、早稲田大学に留学し原田が一九三二年九月に病氣のため、ハワイ大学を退職した後は、一九三三年九月よりハワイ大学講師となり、原田と相賀によって始められハワイ大学日系学生のための「日本語研究会」を、相賀を援けてその運営に当たったのである。⁽⁸⁰⁾

これら五人の原田の教え子たちのうち、坂巻兄弟の兄譲治は、同志社から帰布後、三越デパートに勤務していたが

松岡洋右のすすめで『満州新聞』に入り英文欄の編集長として活躍していた。戦後はハワイに帰国し、Sun Life Company に勤務した。⁽⁸¹⁾

弟の駿三は、帰布してから一九三二年から三三年までホノルルの太平洋学院 (Mid-Pacific Institute) で教師となった。原田の退職後、D・L・クロフォードのすすめによって、一九三三年コロンビア大学大学院博士課程で近代日本史の研究を行い、一九三九年に博士 (Ph. D.) の学位を授与された。一九三六年から原田の後任として、日本史の講師となり、助教授・準教授をへて一九五三年から教授となり一九七一年引退するまで、三五年間にわたり日本史を講義した。また一九五五年から七一年まで、ハワイ大学夏期大学学長として、全米でも屈指の夏期大学に育てあげたのである。研究面では、琉球の研究で『琉球人名・地名辞典』、『琉球書誌』などを相次いで刊行し、坂巻の収集した『宝玲文庫琉球コレクション』は、世界的に有名な文庫として高く評価されている。⁽⁸²⁾ ハワイ大学のサカマキ・ホールは、坂巻の功績をたたえて建てられたものである。

川地は、同志社の Student Professor の任期が終了した後、一九三三年四月より同志社高等商学部より講師の辞令を受け、一年間英語を担当し、一九三四年四月より関西学院高等商業学部教授に就任し英語を担当した。一九三七年七月一六日京都で病氣静養中の原田を見舞う。その日の『原田助日記』に「川地健助来訪、夕食を俱にし帰る。予の遺稿(英文)編輯のことを依頼す⁽⁸³⁾」とある。川地は原田の依頼を受けたため、シドニー・L・ギューリックが書いた“A BIOGRAPHICAL SKETCH OF TASUKU HARADA, D. D., LL. D.” (1912) の補足として、“ADDITIONAL SKETCH” (1937) を執筆したのである。川地は、一九四一年一月一日に日本国籍を受け戦争中を過ごし、一九四六年四月大阪市内に創設された日米会話学院主任教授を兼任し、戦後の京阪神地方の英会話教育に指導的な役割を果たしている。一九五〇年四月、関西学院短大創設にともない同短期大学教授、一九五六年四月、関西

学院大学商学部助教授、一九五九年教授となり一九六五年に定年退職となっている。⁸⁴

相賀は、一九三一年七月に同志社の日本語研修から帰布後、『日布時事』に戻り英文欄記者となり、一九三二年八月二六日に原田の五女美也子と結婚した。一九四一年一月七日の真珠湾攻撃の日に、相賀安太郎が「FBI」に拘引され米本土の収容所に送られたため、『日布時事』社長に就任した。戦争開始後、アメリカ軍により一九四一年一月一日に『日布時事』の発行停止命令、つづいて、一九四二年一月八日に、再刊要請で『布哇タイムス』として再刊した。戦後は、『布哇タイムス』社長とともに、一九六一年にコホ放送局を買収して社長となる。戦後ハワイのマスコミ界で活躍すると一方で多くの社会事業・公共事業に貢献した。⁸⁵

上原は一九三六年ハワイ大学でM・Aを取得し、一九四三年助教授、一九四七年準教授となり、一九五三年よりハワイ大学アジア・太平洋語部長の職につき、日本語・日本文学講座を担当し一九五七年教授となった。そして、一九七三年引退するまでハワイ大学の日本語科をアメリカにおける日本語研究の中心まで引き上げ、とくに日本語は必須外国語の一つであるばかりでなく、学士号獲得専攻科目の一つとなった。アメリカにおける大学のなかで日本語専攻の学士を社会に送り出している数少ない大学になったのである。⁸⁶ 上原には『日本語入門』『ハワイの声』『日系文化』等の著書がある。

一九二〇年、原田がハワイ大学教授として就任し、初めて日本語・日本歴史・日本文学の講座が開講された。それ以来「東洋と西洋の国の相互理解と相互の繁栄と進歩をはかろう」「一つの世界は東西文化の融合されたものでなければならぬ」という原田の国際主義の主張が、数多くの教え子たちに引き継がれていった。戦争という不幸な時期があったが、戦後は、原田の教え子たちは、各方面にわたり国際主義の理想の実現に向けて進んだのである。

むすびにかえて

原田は一九三一年五月一日に、ホノルルの地で受洗満五十年記念を迎えた。感謝記念の意を表するため、教会関係の日本人十数名を食事招き一夕を過ごした。席上配布された写真には原田の近詠が自筆で記されていた。

踏来五十年 天路多曲折

万事皆為益 是予一信条

昭和六年五月一日

受洗五十年記念

溪 鹿 生

当日、招かれて列席した奥村多喜衛は、直ちに所感を次のように書き祝意を表している。

孜孜伝福音 汲々努育英

身健魂愈潔 恩寵五十年

原田はメソヂヤ教会の『楽園時報』に「踏来五十年」を書き、「主イエスの跡を歩み、天父の愛を信じ、我が全身を捧げんと欲する一片の信仰に至っては五十年間之を固持し、尚一生を通じ此の信仰を以て邁進したいと希つてゐるのである」といつている。

そしてこの年は、満洲事変の勃発・国際連盟脱退の動き、翌年は上海事変等、祖国日本のファシズム化が顕著な動きとなつてくる。原田はジュネーブの国際連盟事務局にいる長男健宛に数多くの書簡を送り、軍国主義批判を展開す

る。その書簡のなから若干の言葉を列挙してみよう。⁽⁹⁾

今の日本を禍すのは陸軍の軍国主義で夫れが遂に我国を亡ぼすのではないか、来年の軍縮会議も思ひやられる。……暫く忘れられんとした日本の軍国主義に対する反感が米国に再発し延いて欧州に及び日本が全世界で孤立するに至らんことを怖る。我々の十年の苦心も水泡に帰するのではないか。朝夕東洋と寿府を想ふて祈つて居る！（一九三二年一月一八日）

日本に於ける軍人の跋扈実に憤慨の至り全然同感。世界を敵にして立たんとしても日本内地の容易ならざる事態は一層恐るべしと思う。コンミュニスト、ファシストの計画暴露され捕縛者多数の由。国家の前途を如何にせんとする乎、噫」（一九三二年一月二二日）

昨今の形勢では遂に日支開戦は避くべからざる成行と思はれるが、兩國の開戦は必ず日米の関係を悪化せずには置かない。結局日米戦争の導火線であるまいか、実に容易ならざる形勢と考へられる。……聯盟脱退の考えも我政府当局者間にあるらしく、斯くて世界の平和を攪乱し全世界の同情に逆ひ我国の将来を如何にする心算か、予には如何にしても了解が出来兼ねる。畢竟近年我國民の慢心就中軍閥の野心を抑制する勢力が欠乏した結果に外ならぬかと思はれる。（一九三三年一月三一日）

上海の形勢は益々悪化する一方実に心外千万。総選挙も政友会の大勝利に終る。我國民が戦争にのほせて居る反映と見える。愈々貴地で再び日本の故に聯盟總會が開かれる由。繰返し苦戦のことと想像する。察すよ！何卒無理せぬよう祈る。（一九三二年二月二三日）

上海事変の拡大に連れて米国の対日感情は日に日に悪化しつつあり。従来日本の友人であった人まで愛想をつかし初めた。少くとも極めて embarrassing position に置かれて居る我々とても、今日の日本の aggressive attitude を弁護する訳に行かぬから出来るだけ此問題には触れないように努めて居る位である。……米国内の反日熱漸く抬頭の徵もあるも、或る意味で今日迄冷静なりしことが不思議な位で、米国政府が断然たる態度に出ないのは畢竟するに戦争を欲せず世界平和の為に忍耐して居るに過ぎない。之を以て米国とみ易しとして横暴の態度に出るが如きは誠に沙汰の限りと言ざるを得ない。（一九三二年三月二日）

新渡戸博士夫妻一行寄港、歓迎晩餐会の席上一場の演説があったが白人側では概して不評判を博した。其理由は氏が軍国主義を擁護した様に解されソ連の脅威に責任を嫁して日本の立場を曖昧にしたと思はれた点と、余りにも外交的辞令に富んで大胆に真情を語らなかつたと言ふにあるらしい。同氏の立場も亦同情に堪えない。同氏病後の勢か稍疲労の態に見受けた。兎に角同君の為に現在の故国の空気が暫く離れることは至極良いチャンスであり、日本の地位擁護の為に効あることと思ふ。（一九三二年五月一日）

これらは書簡の一部に過ぎないが、平和機構といわれた国際連盟事務局で奮闘する愛息健に宛たもので、まさに国際人・平和主義者原田の心情が吐露されていわざるをえない。

この間、原田は一九三一年一月一〇日で満六八歳の誕生日を迎えていた。原田はこの頃より身体の不調を訴えるようになってきた。「予の病気は一種の神経衰弱。毛利ドクトルの診断では *actiois* と称しアシッドの過剰に起因すると云ふ。頭が重く足も重く全体がだるく実に不愉快極まる。」と伝えている。そしてその年のクリスマス頃より「来学期限りで大学を退き帰朝するか、或は暫くホノルルで休養するかを決しねばならぬと考へて居る。」と自分の進退について考えはじめ、一九三二年七月四日ついにハワイ大学総長に辞意を表明したのである。

総長は、辞職は己むを得ざるが、退職後もホノルルに滞在するよう慰留につとめ、恩給の外にもし滞在すれば、従来の俸給の半額を支給することまで申し出たのである。しかし、原田は、すでに帰国して静養に努めると決めたあとであるので丁重に辞退した。⁹¹

原田にとって、唯一つ心残りであった五女美也子も、一九三二年九月二六日に結婚式を挙げる事ができた。この結婚は、毛利伊賀が仲人として話を進め、『日布時事』社長の長男重雄との結婚となった。結婚式はセントラルユニオン教会で内外人出席者一〇〇〇名の参加で盛大に挙行されている。⁹² 原田は病気のため欠席の予定であったが、気分が良く式には出席して歩行が困難なため座席に座ったまゝであった。父親代りとしてヌアヌ教会の堀貞一牧師が、花嫁と一緒にバージンロードを歩いたのである。美也子はハワイ大学三年生であったが、結婚後も大学に一年間通いハワイ大学を卒業している。⁹³

一九三二年九月一六日、ハワイ大学が新学期の開校式を迎えた。この式典で原田はハワイ大学名誉教授として迎え入れられた。ハワイ大学開校以来の初めての名誉教授であった。またハワイ大学から法学博士の名誉学位 (J.L.D.)

を授与されたのである。これはハワイ大学が授与した二つ目の法学博士の名誉学位であり、ハワイ共和国大統領でありハワイ準州最初の知事となったサンフォード・B・ドール (Sanford B. Dole) につぐものであった。

この席上、ハワイ大学総長デービット・L・クロフォードは、次のような祝辞をのべた。

原田氏は日本の同志社総長として数々の尽力をなさった後、ハワイ大学へいらっしゃいました。彼は、東西の文化の通訳者としてハワイへいらっしゃったのです。ハワイとアメリカに於いて、彼は日本と西洋の理解者深めようと常に確固とした努力をなさった方として知られています。教授として、講演者として、著者として、また友達として、原田博士は何千人もの西洋人に真の東洋について知識をわけあたえられました。そして一二年が過ぎた今、原田博士は健康上の理由からこの職を辞せうとされています。そこで、ハワイ大学は彼を名誉教授として迎え、法学博士の称号を贈ることにしました。⁹⁴

総長の祝辞は、まさに感動的でハワイ大学における一二年間の原田の業績を、余すところなく表現したものであった。その後間もなく一〇月の初め原田は、多くのハワイの人々の見送りのなか、ホノルル港から日本へと帰国した。

原田がホノルルを去って八年後の一九四〇年二月二日、「原田助博士京都で永眠」という訃報が、ハワイの外字・邦字新聞に大きく報じられた。ハワイでは一九四〇年二月二六日マキキ聖城教会で原田博士追悼会が、内外関係者三〇〇余名の列席のもと盛況に行われた。開会の祈りは、ハワイ滞在中の清水安三、説教は奥村多喜衛牧師、弔辞は、原田をハワイ大学へ招聘した元ハワイ大学総長アーサー・L・ディーンがのべた。ディーンは、原田博士は学業以外に学生との交流を密にし学生を育てたと追憶し、また日本国民の大使として日米関係に寄与した功績を称えた。親族代表毛利伊賀の謝辞で追悼会は終わったが、当夜のアッシシャーは、坂巻駿三・上原征生ら原田の教え子の大学関係者が勤めたのである。⁹⁵ また同志社栄光館で行われた二月二五日の同志社社葬の様子は、教え子の関西学院高等商業学部教授川地健助が『日布時事』に送信してきて、邦文・英文の両面にわたって大きく掲載されたのである。⁹⁶

- (1) 沖田行司『ハワイ日系移民の教育史』（ミネルヴァ書房、一九九七年）には、ハワイ大学時代の原田助の国際主義と移民教育論・日本語学校試訴問題を中心に論述している。
- (2) 竹中正夫「同志社とハワイ―戦前の交流の軌跡をたずねて―」『同志社アメリカ研究』第二二号（一九八六年）は、同志社とハワイとの関連をハワイのフレンド平和奨学金によるスチューデント・プロフェッサーに焦点をあて、その中で原田助について記述している。
- (3) 原田健編『原田助遺集』（一九七一年）五四九ページ。
- (4) 原田健編、前掲書(3)、五一四～五一八ページ。
- (5) 原田健編、前掲書(3)、四九七～四九九ページ。
- (6) ハワイ在任の原田助の孫毛利元二郎氏所蔵。元二郎は、毛利元一・美佐尾（原田助の三女）の二男で外科医の医学博士である。この英文略伝は、前掲書(3)の五〇〇～五一二ページにも収録してある。翻訳に当っては、ハワイ大学修士柳田千代氏の協力をえた。
- (7) 同志社編『同志社百年史』通史編一（同志社、一九七九年）七六七ページ。
- (8) 同志社編、前掲書(7)、七六八～七八〇ページ。
- (9) 同志社編、前掲書(7)、七八〇～七八八ページ。
- (10) 「原田日記」一九二〇年四月二一日の条、原田健編、前掲書(3)、二二九ページ。
- (11)(14) 『日布時事』一九一一年一月二七日。
- (12) 『基督教世界』第一四〇四号（一九一〇年八月四日）の「布哇」欄に奥村多喜衛牧師は、「(キヤッスル)氏は、昨年我邦に遊び、同志社に於ては職員と会食せしことあり。爾来同志社に同情を有ち、原田校長の帰朝の途次当地に立寄りれん事を待望し居れり」と報じている。前掲新聞(11)。
- (13) 『日布時事』一九一一年二月二日。
- (15)(16) 『日布時事』一九一一年二月八日。
- (17) 原田助『信仰と理想』（警醒社、一九〇九年）二四九―二六七ページ。
- (18) 『日布時事』一九一一年二月一〇日。

- (19) 一九一一年一〇月二日の同志社理事会常務委員会で、「布哇キャッスル氏より三千円寄付申込ありたる事」、二月一八日には、「布哇キャッスル氏より三千六拾円拾五銭の寄贈ありたる事」(是は神学部経費ニ使用の事ニ承認を乞フ)の記録がある。『同志社談叢』第五号(一九八五年一月)所収。
- (20) キャッスルは、一九一一年一月二四日の理事会で同志社社友として推薦され、ニューヨーク在住の高峰讓吉らとともに決定された。『同志社談叢』第三号(一九八三年二月)二七八ページ。またウエスターベルトは、一九一七年六月に一万八千六百七十五円〇銭、七月に一千九百五十二円二銭を土地建物買収費に寄付している。『同志社談叢』第五号(一九八五年一月)一八二・一八七・一九〇ページ。一九一九年度『同志社職員録』には、キャッスル、ウエスターベルトの両氏とも社友と記録されている。
- (21) 「原田日記」一九一九年五月二七日の条、原田健編、前掲書(3)、二二二ページ。
- (22) 『楽園時報』第一四卷第三号(愛友会、一九二〇年三月五日)。キャッスルについては、奥村多喜衛「W・R・キャッスル氏第七十五回誕辰」、『楽園時報』第一九卷第四号(一九二四年四月五日)、スカッターについては、本井康博「スカッター家の人びと」、『同志社談叢』第七号(一九八七年二月)を参照。
- (23) 原田健編、前掲書(3)、三三三ページ。
- (24) 「原田日記」一九二〇年四月一四日の条、原田健編、前掲書(3)、二二八ページ。
- (25) 原田健編、前掲書(3)、二二三ページ。
- (26) 『日布時事』一九二〇年四月二七日。
- (27) 『日布時事』一九二〇年五月二六日。
- (28) 原田和歌子編『原田健遺集』(一九七四年)五〇ページ。
- (29) 「原田日記」一九二〇年五月九日の条、原田健編、前掲書(3)、二二九ページ。
- (30) 『加州中央農会月報』第五卷第一〇号(一九二〇年一〇月)。「日本滞在中の日誌」、この日誌は『渋沢栄一伝記資料』第三卷(渋沢栄一伝記資料刊行会、一九六〇年)五〇一〜五〇二ページに所収。千葉豊治については、伊藤卓二『天開の驛足―千葉豊治物語―』(大崎タイムス社、一九八七年)が最も詳しい。しかし、この間の日米関係委員会と千葉豊治との関連については何も記述されていない。
- (31) 『渋沢栄一伝記資料』第三三卷、五〇一〜五〇八ページ。

- (32) 前掲書(31)、五〇九ページ。
- (33) 『原田日記』一九二〇年七月四日の条、原田健編、前掲書(3)、二三四ページ。
- (34) 片桐庸夫「渋沢栄一と国民外交」、『渋沢研究』第一号(一九九〇年三月)四七七ページ。
- (35) 『渋沢栄一伝記資料』別巻第四書簡二(渋沢青淵記念財団竜門社、一九六七年)一八一～一八三ページ。
- (36) 原田健編、前掲書(3)、二三四ページ。
- (37) 『楽園時報』第一五巻第九号(一九二一年九月五日)。
- (38) 前掲書(31)、五三一ページ。
- (39) 前掲書(31)、五二六～五二七ページ。
- (40) 『日布時事』一九二〇年九月四日。
- (41) 前掲書(31)、五八一～五八二ページ。
- (42) 『日布時事』一九二〇年二月九日。
- (43) 『万朝報』一九二〇年二月二日。
- (44) 『基督教世界』一九二一年一月一日。
- (45) 前掲書(31)、五八三～六〇三ページにわたって、一部省略して収録されている。分析については、沖田行司、前掲書(1)、八七～九〇ページ参照。
- (46) 『アロハ年鑑』一九九五年～一九九七年版(ハワイ報知、一九五五年)二九五～二九八ページ参照。ハワイ大学では、通史としての大学史が出版されていないので、筆者が収集した資料のみによる記述となる。ハワイ大学政治学部黒田安昌博士によると、現在、ハワイ大学経済学部ケイミン名誉教授によって『ハワイ大学史』が編集中で、近くハワイ大学出版会から刊行されることである。
- (47) T S S 「綜合制となりし布哇大学」(イ)が『日布時事』一九二〇年八月一日・一七日・一八日・二〇日の五日間にわたって連載されている。総合大学昇格直前の記事である。
- (48) 『日布時事』一九二〇年九月一日。教職員数は、原田助「踏来五十年」、『楽園時報』第二七巻第六号(一九三二年六月一日)による。
- (49) 『日布時事』一九二〇年九月二三日の記事では、在籍者一四五名として人種別の数を挙げているが、雑種は九六名となっている。

おり、この数字では合計すると一四五名を超えるので、雑種三二名と修正したが白人もこのなかに含まれていると推定される。

- (50) 『日布時事』一九二〇年九月四日。
- (51) 『日布時事』一九二二年二月二四日。
- (52) 汎太平洋同盟 (the Pan-pacific Union) と太平洋問題調査会 (Institute of Pacific Relation) の共同出版 Paul F. Hopper. "A History of Internationalism in Hawaii: Between 1900 and 1940." Ph. D. diss., University of Hawaii. 1972 and *Elusive Destiny: the international movement in modern Hawaii*, Honolulu: University Press of Hawaii. 1980 を参照。
- (53) 毛利元一 (一八九〇～一九五八年) は、日系人医界の元老毛利伊賀の長男、東京の府立一中、一高を経て東大医学部を卒業、九州大学外科教室で研究後、一九一八年に来布、一九二〇年にハワイの開業試験に合格し、父伊賀、ドクトルと開業。のち、東大より医学博士の学位を授与される。ハワイ日系人の文化活動の中心人物であった。
- 原田美佐尾 (一九〇二～一九二七年) は、原田助の三女、一九一九年同志社女学校普通部を卒業して東京女子大学入学。一九二〇年八月に中退して父原田助とともに来布。三男一女にめぐまれたが、一九二七年八月に昇天。飯岡織之丞編『毛利美佐尾』(一九二八年五月刊) 参照および毛利元二郎氏のインタビューにおける談話 (一九九六年一月三日)。
- (54) 『日布時事』一九二二年一月一八日。
- (55) 川地健助「追記」より。「英文の略伝」の項参照。
- (56) 『菜園時報』第一八巻第九号 (一九二三年九月五日)、第二二巻第六号 (一九二六年六月五日) 参照。日本に帰国後、パーカー原著・国友忠夫訳『ハワイの現実』(育生社弘道閣、一九四一年) を出版している。
- (57) 『日布時事』一九二九年九月二六日。
- (58) 上原征生『日系文化』(彩光社、一九五五年) 二二ページ。『日布時事』一九三四年八月二八日。
- (59) 原田健編『前掲書』(3) 三二五ページ。
- (60) 相賀安太郎『五十年間のハワイ回顧』(「五十年間のハワイ回顧」刊行会、一九五三年) 四一〇～四一一ページ。原田助の五女・相賀美也子氏のインタビューにおける談話 (一九九七年二月二五日)。
- (61) 『日布時事』一九二三年一月一五日。

- (62) 『日布時事』一九二四年九月一八日。
- (63) 『日布時事』一九二四年十一月二八日。101 Years of Kabuki In Hawaii, Department of Theatre and Dance College of Arts and Humanities University of Hawaii at Manoa, 1995, pp.22~25.
- (64) 『日布時事』一九二七年二月二三日。
- (65) 『日布時事』一九二四年五月二四日。
- (66) 野茂平「会議と代表―見たまゝ聞いた儘」(五)『日布時事』一九二五年七月九日。
- (67) 山岡道男『太平洋問題調査会』の研究(龍溪書舎、一九九七年)所収の「第二章 YMCAの太平洋会議」参照。
- (68) Gwenread E. Allen *The Y.M.C.A. in Hawaii 1869-1969*, The Young Men's Christian Association of Honolulu, 1969. には、第一回ハワイ太平洋会議のハワイ代表団の写真が掲載されているが、その中に坂巻譲治もあり、事務局員として入っているものと思われる。
- (69) 同志社大学に提出した「坂巻譲治履歴書」による。なお、坂巻駿三・川地健助についてもそれぞれ「坂巻駿三履歴書」「川地健助履歴書」を参考にしたが、これらは同志社史資料室に所蔵されている。
- (70)(84) 「川地健助教授年譜・著作目録」『商学論究』第四八号(川地健助教授退職記念号、関西学院大学商学研究会、一九六五年二月)。
- (71) 『日布時事』一九一〇年一月一七日。
- (72)(73) 竹中正夫、前掲論文(2)参照。なお、英語スチューデント・プロフェッサー(A Chair of Student professorship of English)については、『同志社百年史』通史編二(一九二四~一九二七ページ参照)。
- (74) 松井正人・横山学「坂巻駿三プロフィール」(稿)『一九二〇年代ハワイ日系人のアメリカ化の様相』(同志社大学人文科学研究所、一九九五年一〇月)の坂巻駿三のヌアヌ教会講演「開拓者精神」(一九三二年)を参照。
- (75) 『日布時事』一九二九年八月二〇日。
- (76) 相賀美也子氏のインタビューの談話による。
- (77) 『日布時事』一九三〇年二月二九日。
- (78) 『日布時事』一九三一年七月三日。
- (79) 『日布時事』一九二九年六月一五日および上原征生名誉教授(九二歳)の筆者宛書簡による。

- (80) 相賀安太郎、前掲書(60)、四二ページ。
- (81) 坂巻譲治の甥になる Dr. Walter K. Sakamaki の筆者宛書簡による。
- (82) 坂巻駿三の教え子であり、現在ハワイ大学東洋図書館長松井正人博士の談話による。
- (83) 「原田日記」一九三七年七月一六日の条、原田健編、前掲書(3)、二六一ページ。
- (85) 相賀美也子氏のインタビューの談話による。
- (86) 上原征生、前掲書(58)、三七〜三八ページおよび前掲書簡(79)。
- (87)(88) 『菜園時報』第二七卷第六号(一九三一年六月一五日)。
- (89) 原田健編、前掲書(3)、三二六〜三三三ページ。
- (90) 健宛書簡(一九三二年一月一六日)、原田健編、前掲書(3)、三二七〜三二八ページ。
- (91) 健宛書簡(一九三二年七月四日、九月九日)、原田健編、前掲書(3)、三三四〜三三六ページ。
- (92) 『日布時事』一九三二年八月二九日。美也子は原田助の五女で一一歳のとき、原田助とともに来布。ブナホウ・スクールを経てハワイ大学に入学し三年生のときに結婚。二男二女にめぐまれ、現在八九歳で長女佐藤ヘレンやす子と同居している。
- (93) 健宛書簡(一九三二年六月一八日)。原田健編、前掲書(3)、三三四ページ。相賀美也子氏のインタビューの談話による。
- (94) “Honolulu Star-Bulletin” September 16, 1932.
- (95) 『日布時事』一九四〇年二月二七日。
- (96) 『日布時事』一九四〇年三月一七日。